

# 学部・研究科等の現況調査表

教 育

平成28年6月

宮城教育大学

# 目 次

1. 教育学部	1 - 1
2. 教育学研究科	2 - 1
3. 高度教職実践専攻	3 - 1

# 1. 教育学部

I	教育学部の教育目的と特徴	・ ・ ・ ・ ・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・ ・ ・ ・ ・	1 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 18
III	「質の向上度」の分析	・ ・ ・ ・ ・	1 - 29

## I 教育学部の教育目的と特徴

- 1 宮城教育大学は、昭和 40（1965）年の開学以来、一貫して「教員養成教育に責任を負う」大学を標榜し、教員養成教育と現職教育を両輪としながら地域に貢献する大学を目標として、教育・研究および社会との連携に取り組んできた。平成 19 年度の学部課程改革において、ゼロ免課程を廃止し教員養成課程に一本化することによって、専門性の高い単科教育大学として、教員養成教育の分野で真に価値ある大学を目指し、教育研究の充実に努めることを基本的な目標としている。

（国立大学法人宮城教育大学中期目標（第 2 期）より抜粋）

前文 大学の基本的な目標

宮城教育大学は「教員養成教育に責任を負う」大学として、教員養成教育と現職教育を両輪とする地域に密着した教育を行うことを目標とし、教育研究に取り組んできた。第二期中期目標期間においては、第一期中期目標期間の達成成果及び業務実績に関する評価結果を踏まえ、教員養成課程に一本化した専門性の高い単科教育大学として、教育の未来と子どもたちの未来のために、その社会的責任を果たすべく、一層の工夫と努力を加え、教員養成教育の分野で真に価値ある大学を目指して、教育研究の充実に努めることを基本的な目標とする。

- 2 幼児教育・初等教育・中等教育・特別支援教育の教育現場に、高度専門職業人としての優れた資質・能力を持った有為な教員を数多く送り出すことによって、その社会的責任を果たすとともに、東北地区唯一の単科の教員養成系大学として、広域拠点型大学としての機能を十分に発揮する。
- 3 豊かな教養に基づく均衡のとれた深い人間観・世界観を養い、教員の職務から必然的に求められる資質能力、現代的な教育課題に対応する資質能力と併せて、教員として必要なキャリア意識・能力及び生き生きとした主体性や豊かな人間力を養うことを目指して、優れた専門性を有する個性豊かな教員を養成するための教育課程を構築する。

（国立大学法人宮城教育大学中期目標（第 2 期）より抜粋）

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

1 教育に関する目標

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

◎学士課程

○学士課程においては、幼児教育・初等教育・中等教育・特別支援教育の各学校に、優れた資質・能力を持った有為な教員を送り出すことを目的とし、併せて広義の教育分野における人材の養成に当たることを目標とする。

○豊かな教養に基づく均衡のとれた深い人間観・世界観を養い、併せて教員の職務から必然的に求められる資質能力、地球的視野に立って判断し行動するための資質能力、及び変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力を有し、優れた専門性を有する個性豊かな教員を養成するための教育課程を構築する。

- 4 少子高齢化やグローバル化・情報化の進展など、近年の日本社会の構造的な変化に伴ってわれわれが直面している様々な課題や、教育現場において起こっている様々な現代的課題等に対応していくことのできる確かな資質能力を持った人材を養成するために、そうした資質能力の育成に対応した先導的な教育を実施するために必要な、教育の実施体制を整えるとともに、教育環境を整備する。

(国立大学法人宮城教育大学中期目標 (第2期) より抜粋)

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

1 教育に関する目標

(2) 教育の実施体制等に関する目標

○第一期中期目標で達成した本学の実績を継承しつつ、教育現場において確かな力量を発揮し得る人材を養成し、社会の変化や教育現場の課題、学術研究の発展等に即応した先導的な教育を実施するために必要な、教育の実施体制を整え、教育環境を整備する。

- 5 学生に対するキャリア教育と関連させながら、入学から卒業までの学生支援の体系的な整備を行い、学生が教員や友人等との交流を図りながら、目標を持って生き生きと活動できる修学環境の整備に取り組む。

[想定する関係者とその期待]

教職への強い関心と熱意を持ち、本学の教育課程での学修を通して教職を志す者に対して、専門性の高い東北地区唯一の単科教育大学として、その期待に応えていくことが求められている。

また、学び続ける現職教員として自己の専門性の深化・発展を目指す者に対して、教育委員会との協働を図りながら、教員養成・採用・研修の一体的改革をめざすシステムの構築が求められている。

## II 「教育の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 教育活動の状況

## 観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

教員組織編成や教育体制については、「教育研究評議会」がその基本的な方針等を審議するとともに、「教授会」で最終的に審議・決定する。授業科目を担当する教員組織としては、幼児教育・学校教育・国語教育・社会科教育・英語教育・数学教育・理科教育・技術教育・家庭科教育・音楽教育・美術教育・保健体育・特別支援教育の13の講座、および附属の関係施設として環境教育実践研究センター・教育臨床研究センター・国際理解教育研究センター・特別支援教育総合研究センター等が出講元となっており、出講に責任を負う体制となっている。出講元の専任教員（特任教員を含む）の配置は下表の通りである（資料I-1：教員組織の構成、専任教員の配置）。また、専門教育科目以外の教養系科目（一般教育科目）については、全学で出講する体制をとっている（資料I-2：教養系科目における全学出講体制の一例）。

(資料I-1：教員組織の構成、専任教員の配置（平成28年3月31日現在）)

講座・センター等名	専任教員				
	教授	准教授	講師	助教	計
国語教育講座	4	1	1	0	6
社会科教育講座	7	5	0	0	12
数学教育講座	4	2	0	0	6
理科教育講座	10	4	0	0	14
音楽教育講座	5	2	0	0	7
美術教育講座	5	3	0	0	8
保健体育講座	5	3	0	0	8
家庭科教育講座	3	3	0	0	6
技術教育講座	4	1	0	0	5
英語教育講座	3	3	0	0	6
特別支援教育講座	5	3	1	0	9
幼児教育講座	2	0	0	0	2
学校教育講座	6	3	0	0	9
保健管理センター	1	0	0	0	1
環境教育実践教育センター	3	1	0	0	4
教育臨床研究センター	1	1	0	0	2
特別支援教育総合研究センター	1	0	1	0	2
国際理解教育研究センター	1	1	0	0	2
小学校英語教育研究センター	0	0	0	0	0
教育復興支援センター	0	0	0	0	0
専任教員計	69	36	3	0	108

(資料 I - 2 : 教養系科目における全学出講体制の一例)

## 基礎教育科目

科目群	授業科目名	授業形態	出講元
基礎教育必修科目	日本国憲法 a	講義	社会科教育講座
	情報機器の操作 a	講義	学務委員会
	体育実習 a	実習	保健体育講座
	英語 A a	演習	英語教育講座
	特別支援教育概論 a	講義	特別支援教育講座
	環境・防災教育 a	講義	環境教育実践研究センター
基礎教育選択科目	教職基礎技法 a	講義	学務委員会
	人権教育	講義	学校教育講座
	保幼小連携教育論	講義	幼児教育講座
	運動部活動の教育学	講義	保健体育講座

## 基盤教養科目

科目群	授業科目名	授業形態	出講元
人間の発見	東北の文学	講義	国語教育講座
	人間と音楽	講義	音楽教育講座
	美術による表現 A	演習	美術教育講座
	英米文学	講義	英語教育講座
世界の発見	現代のコミュニケーション問題	演習	社会科教育講座
	海外総合演習 A	演習	国際理解教育研究センター
	数学の世界	講義	数学教育講座
科学の発見	現代生活の科学	講義	家庭科教育講座
	理科基盤講義 A	講義	理科教育講座

教員組織の編成にあたって、退職者等の後任補充については、平成 23 年度から「教育研究評議会」が選考委員会の設置について審議・承認することとなっており、全学的な観点から弾力的な教員組織編成を行うことを可能にしている。また、平成 22 年度に「国立大学法人宮城教育大学特任教員規程」を制定し、特任教員の選考について明文化した。さらに、平成 25 年 12 月のミッションの再定義において、教員養成系大学として教職経験を有する教員の採用方針を明示した。こうした教員組織の編成方針に基づいて多様な教員の確保に努め、学生への様々な就学支援を整備している。そうした中で、平成 27 年度の特任教員の任用状況は下表の通りである（資料 I - 3 : 特任教員の人員および所属）。

(資料 I - 3 : 特任教員の人員および所属 (平成 28 年 3 月 31 日現在))			
講座・センター等名	特任教授	特任准教授	計
国語教育講座	2	0	2
数学教育講座	1	0	1
技術教育講座	1	0	1
英語教育講座	0	1	1
特別支援教育講座	1	0	1
幼児教育講座	1	0	1
教育復興支援センター	6	1	7
学長付	1	0	1
キャリアサポートセンター	4	0	4
宮城COCモデル構築プロジェクト事務局	1	0	1
教職大学院	1	0	1
特任教員計	19	2	21

入学者選抜方法の工夫については、教員養成系大学として、「教職への強い熱意を持ち、かつ本学の教育課程のもとで教育を受けるにふさわしい優れた基礎学力を有する者を受け入れる」(第2期中期目標)という学生受入方針をさらに充実させるために、平成22年度から後期日程試験において、従来からのセンター試験の点数に加えて面接を実施するとともに、推薦入試においても人物重視の観点から選抜方法に変更を加えた。また、宮城県教育委員会と連携しながら、「教師を志す高校生支援事業」を平成25年度から実施し、高校生に対して教育学部に関する理解と教職への関心・意欲を高めるための事業に取り組み、教職への強い熱意を持った受験生の確保に努めている(資料I-4:平成27年度教師を志す高校生支援事業実施要領)。



## (資料 I - 4 : 平成 27 年度教師を志す高校生支援事業実施要領)

## 平成 27 年度「教師を志す高校生支援事業」実施要項

1. 目的 将来、宮城県の教育を担おうという志を持った高校生に、その意識の高揚と確かな学力の向上に寄与することで、生徒の進路希望の達成に役立たせる。
2. 主催 宮城県教育委員会、宮城教育大学
3. 担当 宮城県教育庁 高校教育課、宮城教育大学 研究・連携推進課
4. 対象 県内の高校生 計400名(各日200名)
5. 日時 (1) 平成27年8月6日(木) 10:00~15:00  
(2) 平成27年8月7日(金) 10:00~15:00  
※両日とも同様の内容で実施しますので、いずれか1日のみの参加となります。

時 間	会 場	内 容	対 応 者	備 考
10:00	10:40			
10:40	12:00	開会、ガイダンス等 大学教室 教育講演会	大学・県教委 県教委、学校教員、 現役学生	
12:00	13:00	大学会館 昼食		
13:00	13:10	大学教室 ガイダンス	大学教員	
13:10	15:00	研究室等 研究活動体験	大学教員・学生	

6. 会場 宮城教育大学 〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149
7. 参加費 無料
8. 内容
  - (1) 教育講演会・・・宮城県教育委員会職員、現役教師、宮城教育大学学生が、それぞれの立場から、求められる教師像や教師の仕事、大学生生活等について講演します。
  - (2) 研究活動体験・・・オープンキャンパスは大学紹介を主としていますが、この企画は教育大学の研究活動に焦点をあてるものです。実際に大学で行われている研究活動の一端に触れることで、研究の楽しさ、やり甲斐、厳しさを感じてください。また、教員や学生と直接対話することができますので、大学についてより深く知る機会としてください。
9. 参加申し込み
 

各学校でとりまとめるうえ、7月●日(●)まで、別紙様式にて宮城県教育庁高校教育課までメールで申し込んでください。(申込人数が多数の場合には希望に添えない場合があります。)
10. その他
  - (1) 詳細については、参加者に別途通知します。
  - (2) 当日やむをえず欠席する場合には、宮城県教育庁高校教育課まで連絡してください。
  - (3) 昼食は各自用意してください。(大学の食堂は利用可能です。)

教員の教育力向上のための体制については、「目標・評価室」が教育学部と大学院教育学研究科のそれぞれについて、毎年度継続してFD活動を実施している。また、そうした取り組みの内容および成果について、全学の教職員の間で共有することをめざして、「FD通信プリズム」を年2回(平成22年度は3回)発行している。平成22年度以降における教育学部、大学院修士課程、教職大学院のそれぞれにおけるFD研修会(平成22年度はFD懇談会)のテーマについてまとめたものが下表である(資料I-5:FD研修会におけるテーマの概要)。さらに、職員の専門性向上のための取り組みとしては、上記のFD活動に加えて、新任職員に対して、附属学校園での見学活動なども含めた形のSD研修を年度初めの時期に実施している。

## (資料 I - 5 : F D 研修会におけるテーマの概要)

年度	実施日	内容	
22 年度	22.7.21	第 1 回	あなたの成績評価法は大丈夫ですか? !
	22.9.15	第 2 回	授業づくりセミナー
23 年度	23.6.17	第 1 回	教職実践演習について考える
	23.10.5	第 2 回	大学院修士課程の今後を考える
	24.2.15	第 3 回	「研究活動上の不正防止ガイド」説明会
24 年度	24.12.19	第 1 回	提言! 授業評価アンケートの再出発 ー本学における授業評価のこれまでとこれからー
	25.3.13	第 2 回	教育現場の求める教員像と本学の教育 ー教員となった卒業生に対する追跡調査からみた本学の課題ー
25 年度	25.10.23	第 1 回	しょうがい学生支援について
	25.10.30	第 2 回	教員養成の在り方についてー教員養成と大学改革ー
	25.12.18	第 3 回	体系的な教員養成カリキュラムの編成とカリキュラムマップ
26 年度	26.7.2	第 1 回	発達障害学生支援について考える
	26.11.5	第 2 回	学校教育の現場と法律問題について ～セクシャル・ハラスメントや体罰等を中心として～
	26.12.24	第 3 回	修士課程の教育実践に伴う授業科目の改善について
27 年度	27.7.15	第 1 回	『障害者差別解消法』における『合理的配慮』と本学の取り組みについて
	27.7.24	第 2 回	デジタル時代の著作権講座 「あなたの教材・補助資料のコンテンツは大丈夫ですか?」
	27.12.21	第 3 回	教員の資質能力向上フォーラム

教育プログラムの質保証・質向上を確保するために、CAP 制の見直しおよび GPA 制の充実に取り組んだ。前者については、本学では平成 20 年度入学生から CAP 制を導入してきたが、その後平成 26 年度入学生から履修登録上限単位数を 1 年間で 52 単位に引き下げるとともに、平成 28 年度入学生から成績優秀者に対する履修登録単位数の上限緩和を取り入れることとした。後者については、成績評価の標準化・厳格化に向けて、「学務委員会」が整理・分析した結果を授業科目の各出講母体に周知することによって、課題の共有を図っている。この他に、学生および卒業生の意見・要望を分析することを通して、その結果を教育プログラムの改善に反映させる試みを行うことによって、教育プログラムの質保証・質向上に努めている（資料 I - 6 : 授業評価アンケートおよび卒業生アンケートにおける質問項目の概要）。

(資料 I - 6 : 授業評価アンケートおよび卒業生アンケートにおける質問項目の概要)	
【授業評価に関するアンケート】	
A. あなた自身の授業への取り組みに対する評価	
(1) この授業にどのくらい出席しましたか。	
(2) この授業に興味・関心を持って、意欲的に取り組みましたか。	
(3) この授業について、授業時間外学習(予習・復習・課題・レポート・練習等)は、平均して毎週何時間しましたか。	
(4) この授業で何らかの「学び」や「能力の向上」が得られましたか。	
B. 教員の授業のあり方に対する評価	
(5) 授業を受けてみて、この授業科目の目標やねらいは明確でしたか。	
(6) 授業はシラバス「授業の概要」を踏まえつつ、計画的(系統的・発展的)に進められましたか。	
(7) 授業は学生の理解や技能等に配慮しつつ行われましたか。	
(8) 質問や意見述べる機会、授業に自ら参加する機会がありましたか。	
(9) 授業を行う方法は適切でしたか。	
C. 全体を通しての評価	
(10) この授業は総じて満足できるものでしたか。	
【卒業生アンケート】	
<input type="radio"/> 教育内容・方法について	
<input type="radio"/> 資質の修得・学業の達成について	
<input type="radio"/> 教職について	
<input type="radio"/> サポート体制について	
<input type="radio"/> 大学生活について	
<input type="radio"/> 総合評価	

(水準)期待される水準にある

(判断理由)

「教員養成教育に責任を負う」大学を標榜し、教員養成課程に一本化することによって、専門性の高い単科教育大学として、教員養成教育の分野で真に価値ある大学を目指す方向性を大切にしながら、多様な教員の確保と協働体制を構築することに努力している。また、規模の小さい単科大学としての利点を生かしながら、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを『履修のしおり』や本学ホームページ等に明示することによって、教職員全員で共有化する努力を行い、教員養成に対する基本的な方向性を明確にしつつ、教育プログラムの質保証・質向上に取り組んでいる(資料 I - 7 : 教育学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシー)。

(資料Ⅰ－7：教育学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシー)

#### ◇ディプロマ・ポリシー

宮城教育大学の学生は、教育の未来と子どもたちの未来を担う教師として、次のような力を身につけて卒業します。

##### 広い視野と高度な専門性に加え、実践的な指導力を身につけた教師

1-1 広い視野と豊かな教養に裏付けられた深い人間観と、世界を正しく見つめ、異文化を受容できる確かな社会観を身につけている。

1-2 専門とする教科や得意とする分野・領域について、確かな学力と高度な専門性、実践的な指導力を身につけている。

1-3 子どもの発達や心身の状況に応じて、それぞれが抱える問題を理解し、適切に指導できる知識と能力を身につけている。

1-4 常に学び続け、自己研鑽に励み、創意工夫して、よりよい教育を目指す確かな基礎力とひたむきな向上心を身につけている。

##### 強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教師

2-1 教育に対する強い使命感と責任感を持ち、愛情をもって子どもに接することのできる健康な心身と豊かな人間力を具えている。

2-2 組織の一員として、高い倫理観と規範意識、自己制御力を持って、教師としての職責を果たそうとする真摯な姿勢を身につけている。

2-3 子どもとの間はずっと、他の教職員、保護者や地域の関係者とも良好な信頼関係を築きつつ、着実に教育に取り組む姿勢を身につけている。

2-4 時代の状況や社会の変化のなかで、自ら培ってきた知識や体験を活かしつつ、新たな課題に立ち向かう柔軟さや粘り強さを具えている。

#### ◇カリキュラム・ポリシー

宮城教育大学では、広い視野と高度な専門性に加え、実践的な指導力を身につけた教師、また強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教師を養成するために、以下のような方針に基づいてカリキュラム（教育課程）を編成しています。

1. 広い視野と豊かな教養に基づく、均衡のとれた深い人間観と確かな社会観・世界観を有する社会人を養成するためのカリキュラムを編成しています。

2. 力量ある教師を養成するために、教職や教科等の専門科目の学力を重視し、「教育職員免許法」で定められた単位数を大幅に超えて学修するカリキュラムを編成しています。

3. 実践的指導力を具えた教師を養成するために、教育現場と連携した実践的な授業科目を系統的に設定し、大学における学修と教育現場における学修の往還、理論と教育実践の結合を可能にするカリキュラムを編成しています。

4. 環境教育や特別支援教育、国際理解教育など、教育現場で求められる現代的な諸課題について、深い教養と実践的な問題解決能力を具えた教師を養成するために、それらを学ぶことの可能なカリキュラムを編成しています。

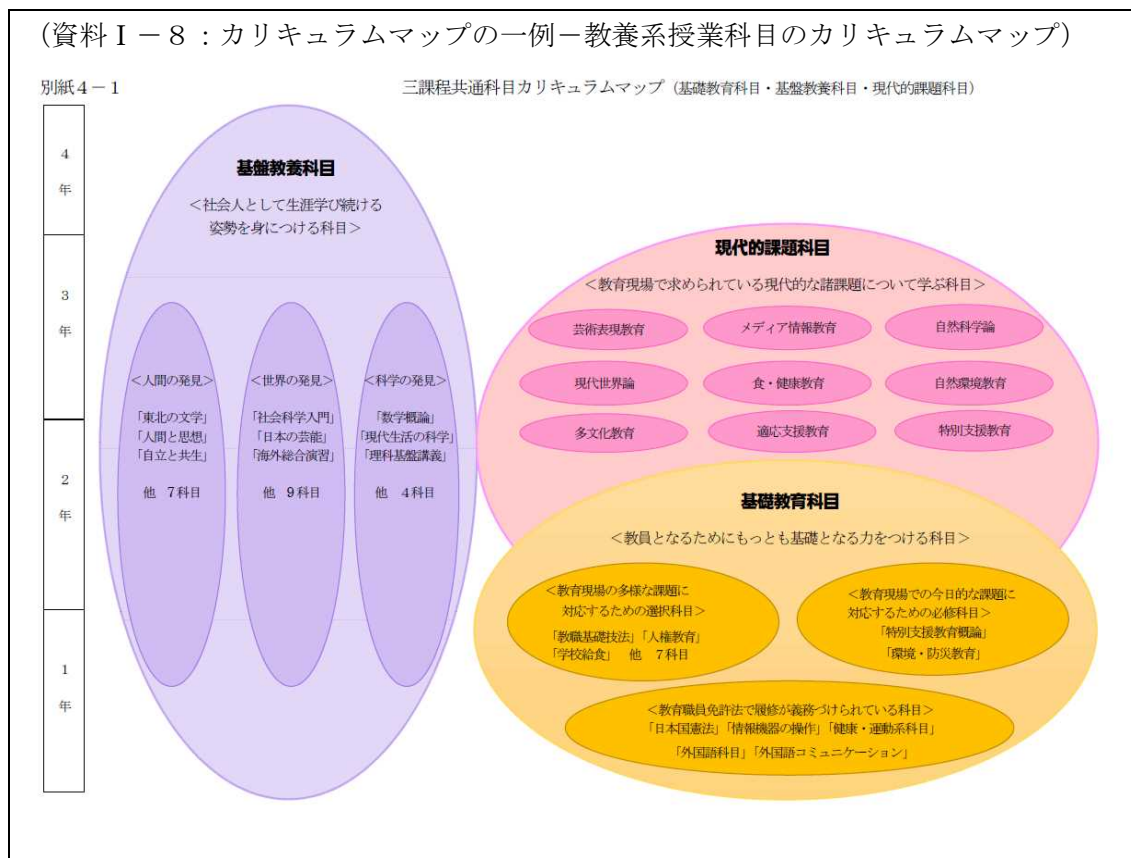
5. 教育に対する強い使命感と責任感を持って、常に学び続け、愛情と理解をもって子どもを指導できる豊かな人間力を具えた教師を養成するためのカリキュラムを編成しています。

**観点 教育内容・方法**

(観点に係る状況)

体系的な教育課程の編成に向けては、「カリキュラム委員会」の下にいくつかの小委員会を設置することによって、不断に継続して取り組んできた。すなわち、平成 21 年度に設置した「カリキュラム検討小委員会」での検討結果を受ける形で、平成 23 年度に「カリキュラム改定検討小委員会」を設置し、主に教養系の授業科目(専門教育科目以外の授業科目)を中心にして改訂を行った。具体的には、教養系の授業科目について、「基礎教育科目」(教員となるためにもっとも基礎となる力をつけるための科目)、「基盤教養科目」(大学で専門分野の勉学を深めるため、また社会人として生涯学び続ける姿勢を身に付けるため、その確かな知的基盤を形成するための科目)、「現代的課題科目」(教育現場で求められているながら、従来の教科や学問分野に収まりきれない現代的な諸課題について学ぶための科目)の大きく 3 つの科目群に再編成した。また、平成 25 年度に「カリキュラムマップ検討小委員会」を設置し、本学が開講している全ての授業科目について、カリキュラムチェックリストおよびカリキュラムマップを作成するとともに、それらをまとめた最終報告書を平成 27 年 3 月にとりまとめた(資料 I-8:カリキュラムマップの一例、資料 I-9:カリキュラムチェックリストの一例)。

(資料 I-8:カリキュラムマップの一例-教養系授業科目のカリキュラムマップ)



(資料 I - 9 : カリキュラムチェックリストの一例 - 専門教育科目の中の教職科目におけるカリキュラムチェックリストの一部)

		A. 教職の基礎となる人間観・社会観・教育観に関する指標				B. 教科・保育内容とその指導に関する指標			C. 子どもの発達に関する指標	
		A-a 広い視野と豊かな教養に裏付けられた深い人間観	A-b 共生社会の中で生きるための確かな社会観	A-c 教育についての理解とそれに基づく使命感と責任感	A-d 教職についての理解とそれに基づく真摯な姿勢	B-a 教科・保育内容についての確かな学力	B-b 教科・保育内容を教材開発につなげる高度な専門性	B-c 授業計画および授業展開に関する実践的な指導力	C-a 子どもの発達や心身の状況についての理解	C-b 発達と学習の心理
1 教職の意義等及び教育の基礎理論に関する科目	教職入門			◎	◎					
				◎	◎					
				◎	◎					
	教育の原理			◎	◎					
				◎	◎					
				◎	◎					
	発達と学習の心理	○		○	◎				◎	
		○		○	◎				◎	
		○		○	◎				◎	
		○		○	◎				◎	
2 教育課程及び指導法に関する科目	教育の制度			○	○					
	教育と社会		◎	◎	◎					
	社会教育論		○	◎	◎					
	国語科教材研究法				○		◎	◎		
						○	◎	◎		
						○	◎	◎		
					○	◎	◎			
	社会科教材研究法				○		◎	◎	○	
					○		◎	◎	○	
					○		◎	◎	○	

※表中の◎印は「特に関連する指標」、○印は「関連する指標」を示している。

上記の取り組みの中で、社会や教育現場のニーズに対応した授業科目の再編および新設を行った。たとえば、東日本大震災以降において注目されてきた学校防災・安全教育の充実に対応するために、従来から全学生に必修としていた「環境教育概論」について「環境・防災教育」への再編を行った(資料 I - 10 : 「環境・防災教育」のシラバス)。また、上記の基礎教育科目の中に、「保幼小連携教育論」や「教職基礎技法」などといった授業科目を平成 25 年度から新たに開講するとともに、グローバル化の進展や小学校での英語教育の強化という教育現場のニーズに対応するために、従来からの「英語」「英語コミュニケーション」の科目を発展させるために「発展英語」や「海外総合演習」という科目の充実を図った。また、学生に対する TOEIC の受験支援と義務化および TOEFL の受験奨励にも力を入れた。

## (資料 I -10 : 「環境・防災教育」のシラバス)

環境・防災教育a			
授業コード	2A2421	代表教員	齊藤 千映美
講義題目	環境・防災教育a	授業担当教員	齊藤 千映美 村松 隆 溝田 浩二 伊藤 芳郎 門脇 啓一 吉田 利弘
免許法相当科目		メールアドレス	—
単位数	2単位	ホームページ	—
毎週授業時間数	(2) 時間	定期時間割	前期 月曜日 3時限 220番教室
履修対象入学年度	H25・26・27 年度入学者対象	集中	
履修対象学年	1/2 年	次年度出講予定	前期
授業形態	講義	講座	環境教育実践研究センター
授業の概要(わらい)	<p>■授業概要 21世紀の地球に起こりうる環境の変化と災害を想定しつつ、想定外の事態にも柔軟に対応する能力育成の方法を概観する。環境問題と災害についての基礎知識、地域の自然理解の手法、危急の事態に対応する野外活動の基礎を知り、児童・生徒の安全管理のための防災と環境保全教育について学ぶ。</p> <p>■授業の到達目標 環境問題と災害についての基礎知識を得る。地域の自然理解の手法、危急の事態に対応する野外活動の基礎、児童・生徒の安全管理のための防災と環境保全教育の重要性を理解する。</p> <p>■授業計画 1 なぜ環境と防災を学ぶのか 2 環境と災害1 地球温暖化 3 環境と災害2 防災教育の 카테고리 4 環境と災害3 エネルギーとゴミ 5 環境と災害 経済格差と食糧資源 6 フィールドワーク技術のすすめ 7 自然とともに生きる人々の暮らし 8 自然とともに生きる人々の暮らし2 9 校庭を活用した環境教育 10 東日本大震災後、学校の現実 11 学校における安全管理 12 教師に求められる心のケア 13 学校教育における環境防災学習1 14 学校教育における環境防災学習2 15 学校における環境防災計画とプログラム</p> <p>■成績評価の方法 出席、授業参加態度、提出物の3点を総合する。</p> <p>■教科書・参考書 講義の中で指示、もしくは資料を配布する。</p> <p>■履修に当たっての留意事項・メッセージ</p>		

上述した体系的な教育課程の編成とも関連するが、教員養成系大学として、教員をめざす学生に大学卒業時まで身に付けさせておきたい資質能力を示したものとしての「教員養成スタンダード」を、カリキュラムチェックリストおよびカリキュラムマップを作成する取り組みの中で取りまとめた。また、それと関連させる形で、平成23年度に教職実践演習検討プロジェクトを設置して検討を始め、平成25年度から「教職実践演習」という授業科目を4年次後期の全学必修として開講している。この授業科目は、「大学でのさまざまな授業科目の履修や課外活動等を通じて学生が身につけた資質能力が、教員に必要な資質能力として有機的に統合されているかどうかを確認する」(『履修のしおり』)ための授業科目であり、ディスカッションや模擬授業などを取り入れた少人数形式の授業として実施している(資料 I -11 : 『履修のしおり』における「教職実践演習」の記載の一部)。



(資料 I - 11 : 『履修のしおり』における「教職実践演習」の記載の一部)

## 1 教職実践演習

「教職実践演習」は、教育職員免許法施行規則の改正により、平成 22 年度以降の入学者を対象に新たに開講することになった科目です。

大学でのさまざまな授業科目の履修や課外活動を通じて学生が身につけた資質能力が、教員に必要な資質能力として有機的に統合されているかどうかを確認することが、この科目のねらいです。

教員に必要な資質能力としては、以下のような事項が挙げられます。

- 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- 社会性や対人関係能力に関する事項
- 幼児・児童・生徒に対する理解や学級経営等に関する事項
- 教科・保育内容等の指導力に関する事項

「教職実践演習」は、大学生活の中でこれらの資質能力が身についたかどうかを振り返る、「学びの軌跡の集大成」として位置づけられる科目です。

学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されています。

学生が「自らの学びの振り返りや学生の達成度の把握」(『履修のしおり』)を行いながら、主体的な学習を促すために、e-ポートフォリオのシステムを平成 23 年度から運用開始している。この e-ポートフォリオシステムでは、履修カルテ A「教職関連科目の履修状況」と履修カルテ B「自己評価シート」という二つのカルテを入学の段階から継続して作成しながら蓄積していくとともに、それに基づいた学年担当教員との定期的・継続的な交流・指導をおこなうものとして機能している(資料 I - 12 : e-ポートフォリオにおける履修カルテ B の例)。この他に、本学附属図書館では、学生の主体的な学習を促すことをめざして、平成 22 年度から実施してきた読書推進活動を拡大・発展させる形で、平成 26 年 4 月に「スパイラル・ラボ」をオープンするとともに、同年 10 月には「シンキング・ブース」および「プライベート・ラボ」といった各施設を新たに開設した(資料 I - 13 : 図書館内各施設の予約利用状況)。中でも、「スパイラル・ラボ」は、教員養成系大学として、教科書と授業実践に着目して設置したものであり、教科書・指導書の研究や模擬授業の実践などができる資料・設備が整備されている。



(資料 I -12 : e-ポートフォリオにおける履修カルテ B の例)

ポートフォリオ学習支援統合システム

教育学部 初等教育教員養成課程 コース | 2016/03/16 14:08:51 | ログアウト

HOME 学生ポートフォリオ 履修カルテ 授業外活動 教職カルテ 教職履修状況 教育実習 自己評価 教職選択 授業選択

自己評価を入力して下さい  
<下書き保存・確定を押さないと登録されません>

【2015年度】

下書き保存 確定 印刷・過去参照  
※確定後も引き続き更新が可能です

「1」できなかった、「2」あまりできなかった、「3」どちらともいえない、「4」できた、「5」十分できた

領域	項目	指標	自己評価
①使命感や責任感、教育的義務等に関する事項	教職の意義	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。	① ② ③ ④ ⑤
	教育の理念・歴史・思想の理解	教育の理念、教育に関する歴史、思想についての基礎理論・知識を習得していますか。	① ② ③ ④ ⑤
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。	① ② ③ ④ ⑤
	教育時事問題	いじめ、不登校、特別支援教育などの学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができているか。	① ② ③ ④ ⑤
②社会性や対人関係能力に関する事項	他者意見の受容	他者の意見やアドバイスを傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができているか。	① ② ③ ④ ⑤
	他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。	① ② ③ ④ ⑤
	役割遂行	集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割を遂行することができますか。	① ② ③ ④ ⑤

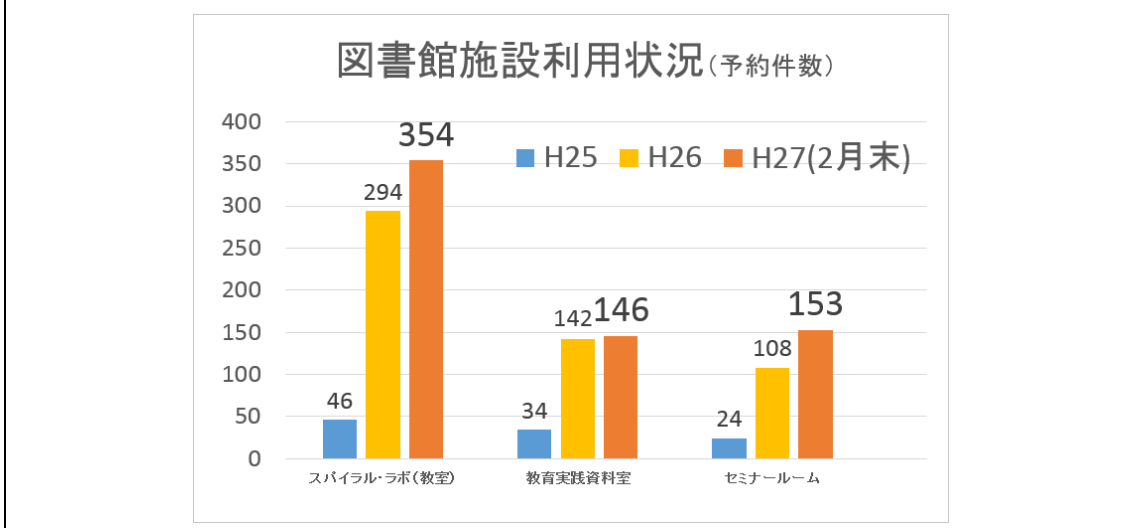
自己評価の詳細(特に評価が高い項目・低い項目や前年度に比べて変化が生じた項目などを中心に、具体的に記すこと)

4年次

教職を目指す上で課題と考えている事項(自らの実質能力の向上のためにどのような取り組みを進めるべきか、あわせて記すこと)

4年次

(資料 I -13 : 図書館内各施設の予約利用状況)



(水準)期待される水準を上回る  
(判断理由)

教員養成教育の高度化の視点から、不断に教育課程の見直しを進めてきている。その際に、教育現場の課題を実践的に分析・検討し、その改善・解決するプロセスを通じ、理論の生成・検証を図る「教育における臨床の学」の構築を希求する視点から、教育内容および教育方法の両面において、教育現場との連続性を意識した授業科目の開設を重視している(資料 I -14 : 教育現場との連続性を意識した授業科目の例)。また、大人数の講義式授業だけでなく、少人数による演習や実験・実習などといったアクティブラーニング方式の授業開設を重視し、学生の主体的な学びを確保する配慮をしている(資料 I -15 : 教科専門科目における受講者人数別の分布状況)。

## (資料 I - 14 : 教育現場との連続性を意識した授業科目の例)

授業科目名	授業概要
理科教育実践体験演習 (初等)	高等学校までの理科教育を見直すとともに、附属小学校等における授業観察を踏まえ、教員の立場で理科教育の内容及び方法を学ぶ視点を身につける。
情報・ものづくり教育実践体験演習 (初等)	高校と大学の学びの違いを意識し、特に「もの」に対する見方と、「情報」とのつきあい方に関する基礎を培う。主に、情報技術を適切に活用し、自らの手でものを作ることをベースとする教育大生として、授業を見る観点を理解し、授業作りの素養を習得する。また情報・ものづくりコース学生を担当する教員の研究紹介を通して、研究に対する視野も広げる。
家庭科教育実践体験演習 (初等)	小学校家庭科の授業観察を通して、授業を成り立たせる条件を分析的に捉えることができるようにする。その際、特に教師の指示・発問・説明などでのパフォーマンスの役割について学び、自ら体験することを通して、実践できるようにする。
幼児教育実践研究 A	幼児教育の実践研究の基礎を理解するとともに、幼児の行動観察を通して、幼児の行動の記録方法、記録のまとめ方と解釈の方法を学習し、各自が取った実際の記録を基に幼児理解を深める。さらに、保育計画の立案や保育実践の観察を通じて、実践的援助方法について幼児理解の視点から考察していく。
社会科教材実践研究 A	小学校社会科に焦点をあて、3 年次学生の附属小学校における教育実習での授業づくりにいっしょに参加することを通して、小学校社会科に関する指導計画および本時の授業設計についての基礎的な素養を習得する。
数学科教材実践研究 B	算数科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の 3 年生にとっては、2 年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。
音楽科教材実践研究 B	附属学校での授業記録を題材として、授業の分析方法について学習する。その際、教師の働きかけが児童の音楽活動にどのように関わっているのかを詳細に検討する。総まとめとして模擬授業を行い、音楽の授業において必要とされる指揮、ピアノ伴奏、歌唱などの音楽的技能の実践的な育成をはかる。
教職基礎技法	教職に就くために必要な基礎的技法として、学級経営の方法や教師としての表現方法 (発声、板書など)、評価に関連することなどを取り上げ、実践力を身につける。教育実習及びその関連授業、本学の様々な学修において活用できる基礎的な技法を身につける。
学校給食	学校給食を題材に学校給食の実際、食教育のあり方、食生活の見直しについて講義する。日本でも数少ない学校給食に関する総合的講義である。講師は本学教員の他、栄養職員、行政機関などの専門家で対応する。学校給食の試食体験や農産物直売所体験も行なう。
性・文化・ジェンダー	自分の性とジェンダー意識を問い直し、性の学力を身につけて生きる力にすること、性とジェンダー教育のできる教師としての基礎的素養を育むことに関連した内容を扱う。
適応支援論 A	適応支援にかかわる「いじめ」「子ども虐待」「不登校」「非行」等について、講義・グループワーク等を通して理解を深める。
食・健康教育の基礎	食・健康教育が必要となる社会的背景や学校での取り上げられ方などについて基礎的な知識を学ぶ。
情報教育実践論	教育の情報化、情報教育の必要性、情報教育用教材、情報機器を活用する技術とその方法を学ぶ。

(資料 I - 15 : 平成 27 年度中等教育教員養成課程の専攻専門科目における受講者数別の科目数)

専攻名	5名以下	6～10名	11～20名	21～30名	31～40名	41～50名	51名以上
国語教育	0	3	4	8	4	1	6
社会科教育	12	6	10	5	0	1	9
英語教育	1	1	8	3	5	5	5
数学教育	2	0	1	3	6	2	8
理科教育	9	4	7	13	0	1	3
技術教育	10	10	8	1	0	0	0
家庭科教育	7	5	10	0	0	0	0
音楽教育	8	11	7	3	2	0	0
美術教育	3	5	12	2	0	0	0
保健体育	2	3	8	12	2	1	0

単位：科目数

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点 学業の成果

(観点に係る状況)

学生が卒業までに取得した単位数をみると、それぞれの課程において、ほぼ全員の学生が卒業に必要な133単位を上回って取得しており、141単位から170単位を履修する学生が多い(資料Ⅱ-1:取得単位状況)。これは教育現場の要請に考慮して、複数の学校種等の教員免許状の取得を目指そうとする学生の意識の反映と思われる。また、本学では、履修資格を設けている授業科目が3つある。その1つは、「3年次教育実習」の履修資格であり、前年度末までに所定の科目を合計49単位以上修得していることが必要である。2つめは、4年次に履修する「卒業研究」と「教職実践演習」の履修資格であり、前者の「卒業研究」については、前年度末までに84単位以上を修得するとともに、3年次教育実習の単位を取得していること、教科科目について卒業に必要な単位数の70%以上を修得していることが参加資格となっている。いずれの履修資格についての取得状況は3つの課程とも95%前後で推移しており、単位取得が計画的に行われ、学業の成果が順調であることが認められる(資料Ⅱ-2:3年次教育実習履修資格取得状況及び卒業研究参加資格取得状況)。

さらに、卒業生に対する学位取得率は87%であり、良好な水準を維持しており、休学率および退学率も1.4%を下回り低いことが本学の特色となっている。

(資料Ⅱ-1:取得単位状況)

	133 ~ 140	141 ~ 150	151 ~ 160	161 ~ 170	171 ~ 180	181 ~ 190	191 ~ 200	201 以 上	合計
22年度	41	70	98	70	34	18	5	11	347
	11.8	20.2	28.2	20.2	9.8	5.2	1.4	3.2	100
23年度	56	80	93	79	24	8	5	5	350
	16.0	22.9	26.6	22.6	6.9	2.3	1.4	1.4	100
24年度	63	67	82	78	44	14	6	5	359
	17.5	18.7	22.8	21.7	12.3	3.9	1.7	1.4	100
25年度	68	54	94	80	39	14	8	2	359
	18.9	15.0	26.2	22.3	10.9	3.9	2.2	0.6	100
26年度	73	62	71	75	41	17	8	1	348
	21.0	17.8	20.4	21.6	11.8	4.9	2.3	0.3	100

備考:各下段は、各年度の合計単位数に対する割合(%)を示している。

(資料Ⅱ－２：３年次教育実習履修資格取得状況及び卒業研究参加資格取得状況)

項目 年度	課程	教育実習履修希 望者(2年次)	教育実習履修資格 取得者(3年次)	比率 (%)	4年次学生数	卒業研究参加 資格取得者	比率 (%)
22年度	初等教育教員養成課程	205	188	91.7%	200	193	96.5%
	中等教育教員養成課程	133	126	94.7%	119	112	94.1%
	特別支援教育教員養成課程	55	51	92.7%	55	52	94.5%
	計	393	365	92.7%	374	357	95.5%
23年度	初等教育教員養成課程	211	193	91.5%	204	194	95.1%
	中等教育教員養成課程	129	122	94.6%	132	126	95.5%
	特別支援教育教員養成課程	54	52	96.3%	54	51	94.4%
	計	394	367	92.9%	390	371	95.1%
24年度	初等教育教員養成課程	209	193	92.3%	214	209	97.7%
	中等教育教員養成課程	123	118	95.9%	136	129	94.9%
	特別支援教育教員養成課程	57	54	94.7%	54	54	100.0%
	計	389	365	93.8%	404	392	97.0%
25年度	初等教育教員養成課程	207	196	94.7%	219	204	93.2%
	中等教育教員養成課程	119	113	95.0%	131	126	96.2%
	特別支援教育教員養成課程	54	52	96.3%	59	57	96.6%
	計	380	361	95.0%	409	387	94.6%
26年度	初等教育教員養成課程	203	193	95.1%	221	212	95.9%
	中等教育教員養成課程	115	108	93.9%	130	123	94.6%
	特別支援教育教員養成課程	61	57	93.4%	54	50	92.6%
	計	379	358	94.5%	405	385	95.1%

本学では、第二期の中期目標において、教員として必要なキャリア意識・能力及び生き生きとした主体性や豊かな人間力を養うために、全学的に「人間力教育」「キャリア教育」の充実を図ることを謳っている。そのために、正課の教育課程による学修に加えて、1年生対象の新入生合宿研修や2年生対象のキャリア形成研修を実施しており、参加した学生からは高い評価を受けている(資料Ⅱ－３：新入生合宿研修におけるアンケート結果の一部)。また、学内外での課外活動やボランティア活動についての学生への情報提供および支援体制を整備したことによって、学校でのボランティア活動や被災地での教育支援ボランティア活動に参加した学生は多数にのぼっている(資料Ⅱ－４：学校でのボランティア活動および被災地での教育支援ボランティア活動に参加した学生数の推移)。さらに、こうした「人間力教育」「キャリア教育」を充実させるための支援体制として、平成23年度に「宮城教育大学学長賞」、平成24年度に「宮城教育大学学長奨励賞」「宮城教育大学放課後子ども支援学長奨励賞」を設けるとともに、サークルステップアップサポート制度を平成24年度に創設した。

## (資料Ⅱ－3：新入生合宿研修におけるアンケート結果の一部)

## (1) 宮城教育大学で学ぶことに対する意識を深めることができた

- ・目標が明確になった。4年間で学ぶべきことを考えた。
- ・仲間の意識の高さがわかった。
- ・考える機会が多かった。
- ・教員としての一歩を踏み出していることを改めて感じたから。
- ・改めて宮教大の良さを知ることができ、宮教大でしかできないことをやろうと思えたから。

## (2) 教員や上級生との交流を通して、自分の進路や将来像を思い描くことができた

- ・講演会で卒業生の話を開けた。
- ・具体的なイメージを持てた。目標がはっきりした。
- ・良い話を開けた。様々な意見を知ることができた。
- ・学生協力委員の先輩の話聞いて、自分の今後に生かしていこうと思えたから。

## (3) 就職や自分の将来に関する見識を高めることができた

- ・自分の考えを深められた。改めて考えた。
- ・明確な目標を持てた。学ぶべきことが見つかった。
- ・教員の魅力を感じた。教員を目指したいという気持ちが強まった。
- ・実際に自分の考えを発する機会があって良かったから。
- ・今までも強く教員になろうと思っていたが色々な事に大学在学中に挑戦しようと思った。

## (4) 同じコース・専攻の仲間との交流を通して、協力関係を深めることができた

- ・レクリエーションで仲間意識が深まった。
- ・より交流を深められた。さらに仲良くなれた。

## (5) 他コース・専攻の学生との交流により、今後の学生生活の幅が広げられそう

- ・新しい友達ができ、話したことがない人と話すことができた。
- ・多くの人と触れ合うことで考え方が広がるから。

## (6) 総合的に判断して、この新入生研修は有意義であった

- ・これからの自分について考えることができた。目標を再確認できた。
- ・多くの友人ができ、将来について改めて自分がどうあるべきかを考えることができた。
- ・先輩（実際に先生になった人）の話を開けたのが、宮教で学ぶ事について考えるきっかけとなった。レクリエーションで皆で声をかけ合って盛り上がれて楽しかった。

(資料Ⅱ－４：学校でのボランティア活動および被災地での教育支援ボランティア活動に参加した学生数の推移)

1) 教育復興支援塾事業

長期休業期間や土日を利用し、学生を派遣して補習授業を実施する。

年度	事業数	派遣学生 (延べ)	(内本学派遣学生 (延べ))	(内他大学の数、派遣学生(延べ))	
				大学	名
24年度	41件	1125名	595名	12大学	530名
25年度	49件	1068名	707名	14大学	361名
26年度	40件	665名	482名	9大学	183名
27年度	32件	555名	430名	9大学	125名

2) 教員補助事業

学生を派遣した授業中の教員補助や放課後塾、課外活動支援を実施する。

年度	事業数	派遣学生 (延べ)	(内本学派遣学生 (延べ))	(内他大学の数、派遣学生(延べ))	
				大学	名
24年度	18件	577名	314名	4大学	263名
25年度	19件	489名	359名	4大学	130名
26年度	12件	348名	240名	3大学	108名
27年度	14件	377名	299名	4大学	78名

【参考】平成23年度 学習支援ボランティア(23年7月～24年3月)・・・562名

本学では、学業の成果達成度や授業をめぐる課題を把握し改善に努めるために、平成11年度から継続して「学生による授業評価アンケート」を実施してきている。調査結果の集計および分析については「目標・評価室」が担当し、教授会に報告している。学業の成果達成度および満足度に関する質問項目については、いずれも「かなり得られた」「よく得られた」および「かなり満足」「たいへん満足」の割合が75%以上という高い水準を維持してきており、良好な結果となっている(資料Ⅱ－５：授業評価アンケートにおける学業の成果達成度および満足度に関する集計結果)。この他にも、学部卒業生および大学院修了生を対象とした「卒業生・修了生アンケート(宮教大の通信簿)」の調査結果や、平成23年度と平成27年度に実施した「学生生活実態調査」の分析結果を見る限り、学生生活に関しては60%以上の学生が「とても満足している」「どちらかといえば満足している」という回答をしている(資料Ⅱ－６：卒業生・修了生アンケートにおける本学の学生生活に関する満足度)。

(資料Ⅱ－５－１：授業評価アンケートにおける学業の成果達成度および満足度に関する集計結果)

質問：この授業で何らかの「学び」や「能力の向上」が得られましたか。

年度	無回答	ほとんど 得られな かった	あまり得 られなか った	どちらと も言えな い	かなり得 られた	よく得ら れた	総計
H22 前期	20	215	484	2,040	5,102	3,464	11,325
	0.2	1.9	4.3	18.0	45.1	30.6	100
H22 後期	12	210	473	2,145	5,704	3,914	12,458
	0.1	1.7	3.8	17.2	45.8	31.4	100
H23 前期	13	214	433	2,113	5,256	3,273	11,302
	0.1	1.9	3.8	18.7	46.5	29.0	100
H23 後期	16	146	392	2,129	6,025	3,858	12,566
	0.1	1.2	3.1	16.9	47.9	30.7	100
H24 前期	20	153	419	1,930	5,326	3,175	11,023
	0.2	1.4	3.8	17.5	48.3	28.8	100
H24 後期	9	131	362	1,920	5,422	3,609	11,453
	0.1	1.1	3.2	16.8	47.3	31.5	100
H25 前期	20	214	467	2,221	5,412	3,394	11,728
	0.2	1.8	4.0	18.9	46.1	28.9	100
H25 後期	12	156	301	1,748	5,748	3,807	11,772
	0.1	1.3	2.6	14.8	48.8	32.3	100
H26 前期	19	164	467	2,092	5,366	3,649	11,757
	0.2	1.4	4.0	17.8	45.6	31.0	100
H26 後期	24	138	345	1,774	5,512	4,083	11,876
	0.2	1.2	2.9	14.9	46.4	34.4	100
H27 前期	21	184	450	2,291	5,360	3,620	11,926
	0.2	1.5	3.8	19.2	44.9	30.4	100
H27 後期	17	147	410	2,080	5,431	4,447	12,532
	0.1	1.2	3.3	16.6	43.3	35.5	100

備考：各下段は、各年度の学期総計に対する割合（％）を示している。



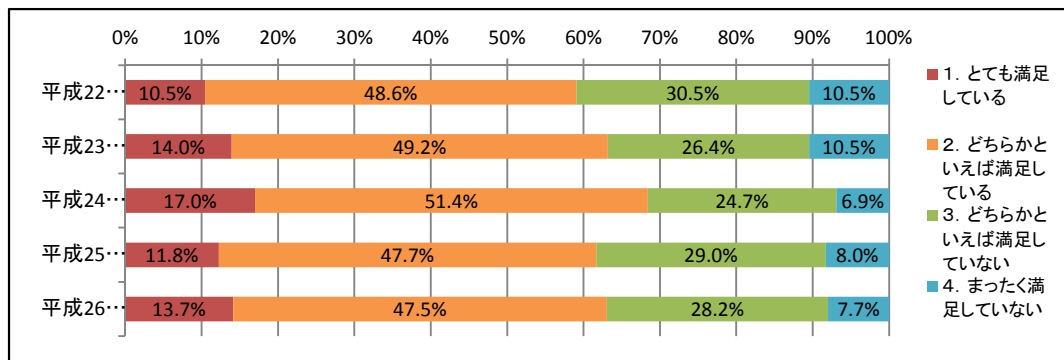
(資料Ⅱ－５－２：授業評価アンケートにおける学業の成果達成度および満足度に関する集計結果)

質問：この授業は総じて満足できるものでしたか。

年度	無回答	ほとんど 不満足	あまり満 足できな かった	どちらと も言えな い	かなり満 足	たいへん 満足	総計
H22 前期	72	186	564	2,105	4,744	3,654	11,325
	0.6	1.6	5.0	18.6	41.9	32.3	100
H22 後期	78	188	484	2,143	5,341	4,224	12,458
	0.6	1.5	3.9	17.2	42.9	33.9	100
H23 前期	84	190	507	2,106	4,907	3,508	11,302
	0.7	1.7	4.5	18.6	43.4	31.0	100
H23 後期	60	122	452	2,094	5,675	4,163	12,566
	0.5	1.0	3.6	16.7	45.2	33.1	100
H24 前期	91	150	459	1,948	4,870	3,505	11,023
	0.8	1.4	4.2	17.7	44.2	31.8	100
H24 後期	76	121	388	1,846	5,129	3,893	11,453
	0.7	1.1	3.4	16.1	44.8	34.0	100
H25 前期	109	192	508	2,172	5,059	3,688	11,728
	0.9	1.6	4.3	18.5	43.1	31.4	100
H25 後期	98	143	339	1,772	5,278	4,142	11,772
	0.8	1.2	2.9	15.1	44.8	35.2	100
H26 前期	84	167	501	1,981	4,989	4,035	11,757
	0.7	1.4	4.3	16.8	42.4	34.3	100
H26 後期	85	133	358	1,741	5,088	4,471	11,876
	0.7	1.1	3.0	14.7	42.8	37.6	100
H27 前期	96	152	489	2,222	5,039	3,928	11,926
	0.8	1.3	4.1	18.6	42.3	32.9	100
H27 後期	113	134	422	1,888	5,152	4,823	12,532
	0.9	1.1	3.4	15.1	41.1	38.5	100

備考：各下段は、各年度の学期総計に対する割合（％）を示している。

(資料Ⅱ－6：卒業生・修了生アンケートにおける本学の学生生活に関する満足度)  
学生生活に関するサポート



		1. とても満足している	2. どちらかといえば満足している	3. どちらかといえば満足していない	4. まったく満足していない	小計	無記入	合計
平成22年度	人数	23	107	67	23	220	9	229
	%	10.5%	48.6%	30.5%	10.5%			
平成23年度	人数	36	127	68	27	258	18	276
	%	14.0%	49.2%	26.4%	10.5%			
平成24年度	人数	42	127	61	17	247	11	258
	%	17.0%	51.4%	24.7%	6.9%			
平成25年度	人数	31	125	76	21	253	9	262
	%	11.8%	47.7%	29.0%	8.0%			
平成26年度	人数	39	135	80	22	276	8	284
	%	13.7%	47.5%	28.2%	7.7%			

(水準) 期待される水準を上回る  
(判断理由)

在学生の履修状況をみる限り良好な水準を維持している。また、在学生および卒業生に対する各種のアンケート調査からは、学生たちが正規の教育課程およびそれ以外での学内外における学生生活の状況について満足している状況がうかがえる。さらに、教員に求められるキャリア意識・能力及び生き生きとした主体性や豊かな人間力を養うための取り組みの充実に努め、特に社会貢献の意識を涵養する点において成果を上げつつある(資料Ⅱ－7：豊かな人間力を育成するための取り組みの成果)。

(資料Ⅱ－7：豊かな人間力を育成するための取り組みの成果－卒業後の意欲に関する調査結果)

社会に貢献する働き方・・・第7位

地域社会に貢献する・・・第5位

この部分は著作権の関係で掲載できません。

(朝日新聞出版 2012年版大学ランキング)

<b>観点 進路・就職の状況</b>
--------------------

(観点に係る状況)

教員養成系の単科大学である本学においては、平成19年度の学部課程改革でゼロ免課程を廃止し教員養成課程に一本化した年度に入学した学生が卒業した平成23年3月以降においては、教員就職者数は概ね200人前後で推移し、教員就職率は60%前後の水準を維持してきていた。しかし平成27年3月卒の学生においては、いずれもそれまでの数値を下回る結果となったが、そうした中でも正規採用者数は128名とそれまでと同水準の数値であった(資料Ⅱ-8:教員就職状況[平成23年3月以降の学部卒業者])。東北地方の各県では、依然として厳しい教員採用の状況が続く中で、本学としてはある程度健闘しているといえるのではないだろうか。こうした状況を受け、従来「キャリアサポートセンター」に配置していた就職支援インストラクターを、平成23年度から特任教授として任用することによって機能強化を図るとともに、教員採用試験に向けての受験指導や、教採合格者を対象とした「フォローアップ講座」をはじめとして学生への就職支援活動の充実に取り組んでいる(資料Ⅱ-9:フォローアップ講座の実施状況)。また、関東圏をはじめとする東北地方以外の地域における教員就職情報の提供を充実させるとともに、関東圏同窓生ネットワークを平成21年度から開催するなどして、東北地方以外の地域での就職開拓にも積極的に力をいれている。

(資料Ⅱ-8:教員就職状況[平成23年3月以降の学部卒業者])

卒業年月	卒業者数	教員		
		本採用	講師	計
平成23年3月	371	104	104	208
平成24年3月	357	118	89	207
平成25年3月	360	145	80	225
平成26年3月	359	128	82	210
平成27年3月	348	128	39	167

(資料Ⅱ-9:フォローアップ講座の実施状況)

講座名	内容
I T講習会	Excel、一太郎、Word、Power Point
普通救命講習	心肺蘇生法、AEDの使用法など
応用実践実習	教室経営、休み時間や放課後の児童生徒との交流や補習支援、掲示、採点、学校行事支援、授業参観見学、学年・学級懇談見学、給食指導補助、授業記録作成等、主に授業以外の実務について
コーチング入門(22~25年度)	生徒、保護者、地域の方々、同僚等とのコミュニケーションスキルの向上を図ることを目的とした、コーチングの手法・技術の基本について
学校勤務のためのオリエンテーション講座(27年度)	新任者の勤務初日からの1カ月程度の過ごし方と注意すべき事項についての情報提供と解説

学部卒業生および大学院修了生に対する本学の進路・就学支援の満足度調査については、上述した「卒業生・修了生アンケート（宮教大の通信簿）」の中に「大学のサポート体制」に関する質問項目を設けているが、就職サポート体制については、約3分の2の学生が「とても満足」「満足」と回答している。また、教員として正規採用された卒業生・修了生の就職先に対しては、平成19年度から「キャリアサポートセンター」の職員が直接出向いて面接形式で「学校訪問調査」を行い、その調査報告書を取りまとめている。その中で、小学校採用および中学校採用については、3分の2を超える卒業生・修了生が「特に優秀である」「優秀である」という評価を受けている（資料Ⅱ-10：学校訪問報告書における学校種別の卒業生評価状況）。その一方で、上記のアンケート調査結果等を分析した際に見出された課題については、次年度以降において、その課題解決に向けて様々な改善策を講じている。たとえば、正規採用以外の臨時的任用の新任教員を対象として、平成26年度から「講師希望者のための勉強会」を仙台市教育委員会の協力をえながら開催したり、平成27年度から新任教師向けに「4月からの学校勤務のためのオリエンテーション講座」を本学教職大学院の現職派遣教員の協力をえながら実施したりしている（資料Ⅱ-11：4月からの学校勤務のためのオリエンテーション講座実施要綱）。

（資料Ⅱ-10：学校訪問報告書における学校種別の新規採用卒業生評価状況）

【小学校採用】

実施年度	評価項目	5段階評価					合計
		1:課題が多い	2:今後の指導力にかかっている	3:普通	4:優秀である	5:特に優秀である	
H26	①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	0	2	6	17	29	54
		0.0%	3.7%	11.1%	31.5%	53.7%	100.0%
H27	①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	3	1	8	23	19	54
		5.6%	1.9%	14.8%	42.6%	35.2%	100.0%
H26	②社会性や対人能力に関する事項	1	3	10	20	20	54
		1.9%	5.6%	18.5%	37.0%	37.0%	100.0%
H27	②社会性や対人能力に関する事項	6	2	8	25	13	54
		11.1%	3.7%	14.8%	46.3%	24.1%	100.0%
H26	③児童生徒理解や学級経営等に関する事項	2	7	20	19	6	54
		3.7%	13.0%	37.0%	35.2%	11.1%	100.0%
H27	③児童生徒理解や学級経営等に関する事項	5	3	18	21	7	54
		9.3%	5.6%	33.3%	38.9%	13.0%	100.0%
H26	④教科内容等の指導力に関する事項	2	4	26	19	3	54
		3.7%	7.4%	48.1%	35.2%	5.6%	100.0%
H27	④教科内容等の指導力に関する事項	1	7	11	28	7	54
		1.9%	13.0%	20.4%	51.9%	13.0%	100.0%
H26	⑤全体評価	2	4	13	18	17	54
		3.7%	7.4%	24.1%	33.3%	31.5%	100.0%
H27	⑤全体評価	4	4	5	30	11	54
		7.4%	7.4%	9.3%	55.6%	20.4%	100.0%

【中学校採用】

実施年度	評価項目	5段階評価					合計
		1:課題が多い	2:今後の指導力にかかっている	3:普通	4:優秀である	5:特に優秀である	
H26	①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	0	1	2	7	14	24
		0.0%	4.2%	8.3%	29.2%	58.3%	100.0%
H27	①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	0	0	0	6	12	18
		0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	100.0%
H26	②社会性や対人能力に関する事項	0	1	6	8	9	24
		0.0%	4.2%	25.0%	33.3%	37.5%	100.0%
H27	②社会性や対人能力に関する事項	0	0	3	5	10	18
		0.0%	0.0%	16.7%	27.8%	55.6%	100.0%
H26	③児童生徒理解や学級経営等に関する事項	0	1	10	13	0	24
		0.0%	4.2%	41.7%	54.2%	0.0%	100.0%
H27	③児童生徒理解や学級経営等に関する事項	0	0	4	9	5	18
		0.0%	0.0%	22.2%	50.0%	27.8%	100.0%
H26	④教科内容等の指導力に関する事項	0	0	11	12	1	24
		0.0%	0.0%	45.8%	50.0%	4.2%	100.0%
H27	④教科内容等の指導力に関する事項	0	0	1	12	5	18
		0.0%	0.0%	5.6%	66.7%	27.8%	100.0%
H26	⑤全体評価	0	1	7	8	8	24
		0.0%	4.2%	29.2%	33.3%	33.3%	100.0%
H27	⑤全体評価	0	0	2	5	11	18
		0.0%	0.0%	11.1%	27.8%	61.1%	100.0%

備考：各下段は、各年度の合計に対する割合（%）を示している。

(資料Ⅱ-11：4月からの学校勤務のためのオリエンテーション講座実施要項)

「4月からの学校勤務のためのオリエンテーション講座」

1. 主催：イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会
2. 対象：4月からの学校勤務を予定している学生・院生 その他
3. 期日：平成28年1月22日・金曜日 3時限・4時限（2コマ連続）
4. 会場：210番教室
5. 講師等：宮城県・仙台市内の現職教員（教職大学院現職派遣教員大学院生）
6. 次第

開会行事・・・イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会（10分）
講話・・・・・・各担当者（15分）
3コマ目 ①庄子記代先生 ②川村先生 ③萩原先生 質疑
4コマ目 ④木野田先生 ⑤高橋先生 ⑥佐藤順先生 質疑
各コマの3名の講話終了後・担当者と受講者間でフリートークセッション
アンケート記入（10分）
閉会行事・・・イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会（5分）

7. 内容：
  - 新任者の勤務初日からの1カ月程度の過ごし方と注意すべき事項についての情報提供と解説
8. 講話内容（一部）
  - ①新任式・始業式・入学式までの期間において、新任者はどのような動きをするのか
  - ②教師として「あいさつ」する時に心掛けること、話す内容のポイントについて
  - ③担任や副担任として教室等の「環境整備」の仕方と「保護者」や「地域」の方とのかかわりについて
  - ④新任者の赴任地でのふるまい方について
  - ⑤最初の学級活動（PTA学級懇談会などにも活用できる）内容について
  - ⑥初任者対象に行われる初任者研修の概要、および初任者の代替講師の役割について
9. 企画趣旨：

この企画は、本学と宮城県・仙台市の各教育委員会と協働して「学び続ける教員（イノベティブ・ティーチャー）の養成・育成の在り方を検討し実現するための事業の一環です。その中でも、養成の最終段階から、卒業後、初任後5年研修までの時期を特に重要と考え、標記のような講座を実施することにしました。

4月から学校に勤務する卒業生のみなさんの不安な気持ちを、少しでも解消できるように、新任時に想定される具体的な内容を一部かもしれませんが、お伝えし、議論できればと考えています。

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

教員養成課程に一本化した専門性の高い単科教育大学をめざす本学は、入学前の時期か

ら卒業後の時期まで一貫して優れた教員養成のための取り組みを体系的に構想している。すなわち、入学前の時期における「教師を志す高校生支援事業」から始まって卒業生に対する「学校訪問調査」までにおいて、教員を志望する者のニーズを的確に把握するとともに、その期待に応える取り組みの充実に努めている（資料Ⅱ－12：教員養成に向けたキャリア教育に関する体系的な支援体制の整備）。

（資料Ⅱ－12：教員養成に向けたキャリア教育に関する体系的な支援体制の整備）

学生の就職活動を支援することを目的として平成16年10月にキャリアサポートセンターが設置され、特に教員を目指す学生の支援を中心に、以下に掲げる業務を行っている。

- ・就職指導・相談及び支援に関すること
- ・就職情報の収集・提供及び就職についての調査研究に関すること
- ・キャリア開発に関すること
- ・卒業生に対する就職支援に関すること
- ・その他就職支援に関すること
- ・ボランティア、インターンシップ等の企画・運営に関すること
- ・ボランティア、インターンシップ等の関係諸機関との連絡調整に関すること
- ・その他ボランティア、インターンシップ等の支援に関すること

キャリアサポートセンターの運営に関する組織（平成28年3月31日現在）

- ・キャリアサポートセンター運営委員会

（委員長：連携担当理事・副学長、委員：教員7名、特任教授4名、支援インストラクター1名および学生課長）

- ・この他に、学生課職員が以下1名配置されている。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

##### 事例1：体系的な教育課程編成の取り組み

第2期中期計画において、体系的な教育課程の編成について「教育の目標とカリキュラムの全体像を明確にし、改めて全学的な合意形成を図ることによって、教員相互の間で役割分担を明確にし、授業が総体として有機的に行われるような、構造化されたカリキュラム運営を目指す」と記載していることを受けて、平成25年度からカリキュラムチェックリストおよびカリキュラムマップの作成に取りかかり、その作成過程においてディプロマ・ポリシーを基にしながら「教員養成スタンダード」を作成した。また、平成25年度から取り組んでいる「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の中で、教員養成教育の方向性を「生涯にわたって自ら学び続け、その質的向上を目指す教員（イノベティブ・ティーチャーと呼称）」の育成ととらえ直し、宮城県教育委員会・仙台市教育委員会と協働しながら、教員の養成・採用・研修の全体を見通した上で、教員養成教育の高度化に努めている。

#### (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

##### 事例2：「人間力教育」「キャリア教育」の充実

正規の教育課程に基づく優れた教員の育成と併せて、「教員として必要なキャリア意識・能力及び生き生きとした主体性や豊かな人間力を養うために、全学的に『人間力教育』『キャリア教育』の充実を図る」という第2期中期目標を達成するために、平成23年度に制定したディプロマ・ポリシーの中の柱のひとつに「強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教師」の育成を掲げた。そのために、学内外における課外活動やサークル活動・ボランティア活動を充実するために支援体制を整備する取り組みを行った。

##### 事例3：入学前から卒業後までを見通した進路・就職指導

大学における教員養成教育を充実させるために、入学前の高校生に対して、教員養成に焦点をあてた広報活動を行うことによって、「教育に強い関心を持ち、確かな基礎学力とたゆまぬ学習意欲、そして自ら教員として、人間としての成長を目指す使命感・向上心を有する学生を受け入れます」というアドミッション・ポリシーの実質化に取り組んだ。また、在学中の学生に対しては、上述した通り、正規の教育課程での教育指導をも視野に入れつつキャリア教育・人間力教育にも積極的に取り組んだ。さらに、教員として正規採用された卒業生・修了生に対して、就職先を直接訪問して、資質能力の特徴及び課題について追跡調査を行い、その結果を学生の修学指導に反映させていくしくみを構築している。

## 2. 教育学研究科

I	教育学研究科の教育目的と特徴	・・・	2-2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	2-4
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	2-4
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	2-18
III	「質の向上度」の分析	・・・	2-27



## I 教育学研究科の教育目的と特徴

- 1 宮城教育大学は、昭和 40（1965）年の開学以来、一貫して「教員養成教育に責任を負う」大学を標榜し、教員養成教育と現職教育を両輪としながら地域に貢献する大学を目標として、教育・研究および社会との連携に取り組んできた。昭和 63 年度に教育学研究科修士課程を設置し、その後、平成 20 年度に教育学研究科の中に専門職学位課程（教職大学院）を開設するとともに、修士課程を改組することによって、専門性の高い単科教育大学として、教員養成教育の分野で真に価値ある大学を目指し、教育研究の充実に努めることを基本的な目標としている。

（国立大学法人宮城教育大学中期目標（第 2 期）より抜粋）

前文 大学の基本的な目標

宮城教育大学は「教員養成教育に責任を負う」大学として、教員養成教育と現職教育を両輪とする地域に密着した教育を行うことを目標とし、教育研究に取り組んできた。第二期中期目標期間においては、第一期中期目標期間の達成成果及び業務実績に関する評価結果を踏まえ、教員養成課程に一本化した専門性の高い単科教育大学として、教育の未来と子どもたちの未来のために、その社会的責任を果たすべく、一層の工夫と努力を加え、教員養成教育の分野で真に価値ある大学を目指して、教育研究の充実に努めることを基本的な目標とする。

- 2 平成 20 年度に設置した専門職学位課程（教職大学院）では、学校現場において実践的応用力をもって中核的・指導的役割を果たすスクールリーダーとしての力量を育成するために、教職としての高度な専門性を前面に掲げながら、それが各分野の深い学問的知識・能力の育成によって支えられるという形で、両者を統合的に追求することを目指している。
- 3 専門職学位課程（教職大学院）の設置に伴って改組して再出発した修士課程では、高度な専門性をもって、教育を学問として深く探求・実践し、より優れた教員として活躍できる人材の養成を基本理念としている。

（国立大学法人宮城教育大学中期目標（第 2 期）より抜粋）

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

1 教育に関する目標

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

◎大学院課程

○専門職学位課程（教職大学院）は、学校現場及び地域の教育に実践的応用力をもって中核的・指導的役割を果たすスクールリーダーとしての力量と、優れた専門的職業能力を備えた人材の育成を目標とする。

修士課程は、高度の専門性を求め、教育を学問として深く探求・実践し、より優れた教員として活躍できる人材の育成を目標とする。

○専門職学位課程（教職大学院）と修士課程それぞれの位置づけと役割の明確化を図り、大学院教育の全体的な充実・発展を目指す。

- 4 専門職学位課程（教職大学院）と修士課程のいずれにおいても、本学が開学当初から永年にわたり目指してきた、教育現場の課題を研究の対象として実践的に分析検討し、改善・解決するという「教育における臨床の学」を希求していくことを大学院での教育と研究の中核としている。

（国立大学法人宮城教育大学中期目標（第2期）より抜粋）

I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

1 教育に関する目標

(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標

◎大学院課程

○専門職学位課程（教職大学院）及び修士課程において、それぞれの位置づけと役割にふさわしいカリキュラムを再検討し、それに基づいて教育体制の一層の充実を図る。

- 5 学校教育の現場および一般社会からの要請に応え、教育の質をさらに向上させ、教育現場を活性化するために、本学大学院で学ぶ意欲をもった優秀な学生及び現職教員を中心とした社会人を積極的に受入れることによって、教員養成の高度化を目指す。

[想定する関係者とその期待]

学校現場で求められている様々な課題の解決に「チーム学校」の一員として貢献でき、実践的応用力をもって中核的・指導的役割を果たすスクールリーダーを育成することによって、学び続け深化しようとする現職教員および教育委員会をはじめとする地域の教育界の期待に応えていくことが求められている。

また、教職への強い関心と熱意を持ち、学部での勉学を継続的にさらに深め、教育を学問として深く探求・実践することを通して、高度専門職業人としてのより優れた教員をめざそうとする学部卒業生の期待に応えていくことが求められている。

## II 「教育の水準」の分析・判定

## 分析項目 I 教育活動の状況

## 観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

教員組織編成や教育体制については、修士課程では「教育研究評議会」がその基本的な方針等を審議するとともに、「教授会」で最終的に審議・決定する。また、教育内容や教育方法の実務的な検討は「学務委員会」が担当している。教育の実施体制としては、特別支援教育専攻の特別支援教育専修、および教科教育専攻の国語教育専修、社会科教育専修、数学教育専修、理科教育専修、音楽教育専修、美術教育専修、保健体育専修、生活系教育専修、英語教育専修の合計 10 の専修から構成している。各専修における専門科目の他に、「臨床教育研究」と「学校実践研究」という教育実践を伴う授業科目においては、教科専門担当教員と教科教育担当教員との協働体制がとられているとともに、学校現場での教職経験のある特任教授（学長付）がその一部を担当している。各専修の専任教員の配置は下表の通りである（資料 I - 1：修士課程における教員組織の構成、専任教員の配置）。一方、専門職学位課程では「教育研究評議会」が基本的な方針等を審議・決定するとともに、「教職大学院教員会議」が修士課程における「教授会」と同様な役割を担っている。教育内容や教育方法の実務的な検討は「教職大学院教員会議」の中に設けられている教務部会が担当している。教員の実施体制としては、専任教員 17 名（研究者教員 11 名、実務家教員 6 名）を配置し、教育課程、教科指導、生徒指導・教育相談、学級・学校経営、学校教育・教職の共通 5 領域の授業科目と研究指導に携わっている。また、これらの教員とは別に、本学修士課程担当教員等 82 名が、「教科・領域専門バックグラウンド科目」の担当や指導ユニットの一員となるなど、兼任教員として指導に携わっている。5つの共通領域ごとの専任教員の配置は下表の通りである（資料 I - 2：専門職学位課程における教員組織の構成、専任教員の配置）。

(資料 I - 1：修士課程における教員組織の構成、専任教員の配置)

(平成 28 年 3 月 31 日現在)

専攻	専修	専任教員				
		教授	准教授	講師	助教	計
特別支援教育専攻	特別支援教育専修	5	3	0	0	8
教科教育専攻	国語教育専修	5	2	0	0	7
	社会科教育専修	7	5	0	0	12
	数学教育専修	4	2	0	0	6
	理科教育専修	12	4	0	0	16
	音楽教育専修	5	2	0	0	7
	美術教育専修	5	3	0	0	8
	保健体育専修	5	3	0	0	8
	生活系教育専修	7	5	0	0	12
	英語教育専修	3	3	0	0	6
専任教員計		59	31	0	0	90

(資料 I - 2 : 専門職学位課程における教員組織の構成、専任教員の配置)

(平成 28 年 3 月 31 日現在)

専攻	専任教員				
	教授	准教授	講師	助教	計
高度教職実践専攻	12	5	0	0	17
専任教員計	12	5	0	0	17

入学者の選抜方法については、修士課程では平成 24 年度にカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーを新たに制定したことに伴い、平成 16 年度に制定したアドミッション・ポリシーに修正を加えるとともに、「養成したい教員像・人材像」と「求める学生像」をより明確なものにした(資料 I - 3 : 修士課程におけるアドミッション・ポリシー)。これらについては、大学院案内やホームページ等を通して入学希望者に周知している。専門職学位課程では、現職教員の選抜について、面接試験と入学前オリエンテーション・ガイダンスの連動により、研究テーマの決定と指導体制の最適化を図っている(資料 I - 4 : 専門職学位課程におけるオリエンテーション・ガイダンスを導入した入試)。また、宮城県教員採用試験合格者の名簿登載期間を最大で 2 年間延長することで、資質と意欲の高いストレートマスターの入学に便宜を図っている。

(資料 I - 3 : 修士課程におけるアドミッション・ポリシー)

**1.目的**

広い視野に立って深い学問的知識を授け、学校教育の場における理論と実践の研究能力を高め、教育研究の推進と教育実践の向上に資する高度の能力を養うことを目的としています。

**2.養成したい教員像・人材像**

学部段階や教育現場において培われた各分野の学問的知識・能力と実践的指導力をさらに探求・深化させることにより、特定分野に関する深い学問的知識・能力を有し、理論的・実践的研究を通じて教育現場における今日的な課題の解決に寄与しうる教員、あるいは、教育にかかわる様々な場で教育研究の推進と教育実践の向上に寄与しうる人材の養成を目指します。

**3.求める学生像**

教育実践の基盤をなす専門的な学問・芸術・文化の研究に取り組むために必要な資質・能力を有するとともに、教育現場で生じている諸問題の理論的・実践的研究に強い意欲を持つ者を求めます。

(資料 I - 4 : 専門職学位課程におけるオリエンテーション・ガイダンスを導入した入試)

平成28年度教職大学院入学前オリエンテーション・ガイダンス実施要項

- 1 日 時 平成28年2月20日(土) 10:00～
- 2 場 所 宮城教育大学2号館 221教室  
(集合・全体説明)  
(班別ガイダンス)
- 3 担当者 教職大学院専任教員全員
- 4 内 容
- (1) 【全体オリエンテーション・ガイダンス】(10:00～10:30)
- ① 教務部会長あいさつ
  - ② 専任教員の紹介
  - ③ 研究テーマと指導体制
  - ④ 教員ユニットの編成について
  - ⑤ 入学前の準備等について
  - ⑥ その他
- (2) 【班別オリエンテーション・ガイダンス】(10:30～11:00)
- 入試時の研究テーマをもとに、下記 i)～v) の班(仮)に分かれて面談・意見交換を行う。
- i) 教育課程の編成・実施
  - ii) 教科等の指導法
  - iii) 生徒指導・教育相談
  - iv) 学級経営・学校経営
  - v) 学校教育と教職のあり方
- (3) 【ストレートマスター修学相談会(全員)】(11:10～12:10)
- 【現職教員修学相談会(希望者)】(11:10～)
- 【学校における実践研究免除申請者の授業ビデオまたは模擬授業による評価】(11:10～)

平成28年度 教職大学院新入生オリエンテーション・ガイダンス 実施要項

- 1 日 時 平成28年4月7日(木) 13:30～16:20
- 2 場 所 宮城教育大学6号館2階 教職大学院教育実践研究室
- 3 内 容
- (1) 教職大学院専任教員・大学院教務係員紹介 13:30～
- (2) 「履修のしおり」の説明について 14:00～
- (3) 諸連絡等 14:50～
- (4) 班別オリエンテーション (会場:各班教員の指示のとおり移動) 15:00～16:20
- 【班別オリエンテーション説明者】
- ・教育課程班(吉村教授)
  - ・教科指導班(村松教授)
  - ・教育相談班(佐藤教授)
  - ・学級・学校経営班(本図教授)
  - ・学校教育・教職班(平教授)

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>【1】 研究テーマの絞り込み</li> <li>【2】 履修授業科目（共通5科目、バックグラウンド科目）の絞り込み</li> <li>【3】 指導体制と修学指導（履修相談）</li> <li>【4】 施設等ガイダンス（施設見学：院生研究室、附属図書館、保健管理センター等）</li> </ul> |
|--|

教員の教育力向上のための体制については、「目標・評価室」が実施している FD 活動において、毎年度大学院教育学研究科（修士課程・専門職学位課程）にかかわるテーマも含めるようにしている。そして、こうした取り組みの内容および成果については、年2回（平成22年度は3回）発行している「FD通信プリズム」を通して、全学の教職員の間で共有するように努めている（資料I-5：大学院教育学研究科にかかわるFD研修会のテーマ一覧）。また、こうした取り組みとは別に、専門職学位課程においては独自にFD部会を設け、年2回の授業公開で教員相互の授業を観察し合い、授業方法・内容の改善につとめている。このほか、自己点検・評価部会で実施している院生アンケート（年2回）、および院生と教員の意見交換会（年2回）も、教員の教育力向上を意図して実施しているものである。

（資料I-5：大学院教育学研究科にかかわるFD研修会のテーマ一覧）

年度	実施日	内容
23年度	23.10.5	大学院修士課程の今後を考える
25年度	25.10.30	教員養成の在り方について－教員養成と大学改革－
	25.12.18	体系的な教員養成カリキュラムの編成とカリキュラムマップ
26年度	26.12.24	修士課程の教育実践に伴う授業科目の改善について
27年度	27.12.21	教員の資質能力向上フォーラム

教員プログラムの質保証・質向上を確保する取り組みとしては、修士課程では、教員養成の高度化をめぐる社会動向について把握するとともにそれに対して適切に対処するための取り組みを継続的に行ってきた。すなわち、平成23年4月に『修士レベル化』問題に関する検討プロジェクトを設置し、同年12月に報告書を取りまとめている。その後、平成24年7月に、カリキュラム委員会の下に「修士課程検討小委員会」を設置し、平成26年3月に報告書を取りまとめている。一方、専門職学位課程では、宮城県教育委員会・仙台市教育委員会との意見交換の機会を定期的に設け（平成25年度までは「教職大学院に関する連携協力会議」を開催、平成26年度以降は「教育連携諮問会議」の議事として教職大学院を取り上げている）、そこでの意見をもとに学内で対策を講じてきた（平成27年度教職大学院改革実施WGなど）。その結果、平成26年度から、教育経営コースと授業力向上コースの2コース制に分けるなど、教育現場の課題に即したカリキュラムの改善を重ねている（資料I-6：教職大学院認証評価における自己点検評価報告書の目次）。

(資料 I - 6 : 教職大学院認証評価における自己点検評価報告書の目次)

教職大学院認証評価  
自己評価書

目次

I	教職大学院の現況及び特徴	1
II	教職大学院の目的	2
III	基準ごとの自己評価	
	基準領域 1 理念・目的	3
	基準領域 2 学生の受入れ	7
	基準領域 3 教育の課程と方法	11
	基準領域 4 学習成果・効果	27
	基準領域 5 学生への支援体制	34
	基準領域 6 教員組織	38
	基準領域 7 施設・設備等の教育環境	47
	基準領域 8 管理運営	49
	基準領域 9 点検評価・FD	56
	基準領域 10 教育委員会及び学校等との連携	60

(水準)期待される水準を上回る  
(判断理由)

教育学研究科では修士課程、専門職学位課程のいずれにおいても、理論と実践との往還を基本としながら、「教職としての高度な専門性の育成」と、それが「各分野の深い学問的知識・能力（教科専門としての専門性）の育成」によって支えられるという形で、両者を統一的に追求する大学院教育をめざしている。そして、その目標の実現に向けて、修士課程と専門職学位課程との役割分担を明確に示しつつ、教育実施体制の整備に真摯に取り組んできている（資料 I - 7 : 修士課程と専門職学位課程のディプロマ・ポリシー）。

(資料 I - 7 : 修士課程と専門職学位課程のディプロマ・ポリシー)

修士課程のディプロマ・ポリシー

1. 高度な専門性をもって、教育を学問として深く追究・実践し、教育現場において今日的な課題の解決に寄与しうる優れた教員・人材として活躍できる知識・能力
2. 教育における理論と実践の研究能力を高め、幅広く教育現場にかかわる能力
3. 生涯にわたって自ら学び続けようとする態度

専門職学位課程のディプロマ・ポリシー

高度教職実践専攻では、所定の単位を修得し、スクールリーダーおよびその候補者としてふさわしい「総合的な教師力」を身につけた者に学位を授与します。

院生がもつ研究課題に対応させた指導体制、教師力育成を図る専攻科目を取り入れた教育課程を整備するとともに、課題解決に向けた研究・研修の場を提供します。



## 観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

体系的な教育課程の編成に向けて、修士課程では平成 24 年度にディプロマ・ポリシーを制定するとともにアドミッション・ポリシーに修正を加えたことと連動させながら、カリキュラム・ポリシーを新たに制定した(資料 I-8: 修士課程におけるカリキュラム・ポリシー)。このカリキュラム・ポリシーでは、修士課程の教育課程を大きく「専門科目」、「臨床教育研究・学校実践研究」および「特別研究」という 3 つの柱から構成することを明示した。その中で、「臨床教育研究・学校実践研究」という教育実践を伴う授業科目については、平成 22 年度に各専修に対する実施状況調査を実施し、その調査結果に基づきながら一部修正を加えた。また、「特別研究」については、平成 24 年度に「修士課程論文審査評価票」を作成し、評価基準を明らかにした上で、修士論文の成績評価の厳密化に取り組んだ。一方、専門職学位課程においては、設置以来、共通 5 領域の履修を基本としながら、各院生の研究テーマに応じて「教科・領域専門バックグラウンド科目群」として開講される 67 科目の中から選択させるしくみをとっている。また、実践的指導力の向上のために、「学校における実践研究」として、2 年間で 5 回にわたる実習(「基礎実践研究 I・II」「応用実践研究 I～III」)を設けている。それらの経験について理論研究をふまえて省察し一般化を行う「実践適応と評価・分析論 A・B」、実践で活用可能な教材・教具等を開発する「臨床教育総合研究 A・B」などを通して、理論と実践の往還・融合を図っている(資料 I-9: 専門職学位課程における理論と実践との往還・融合に配慮した授業科目の例)。

(資料 I-8: 修士課程におけるカリキュラム・ポリシー)

1. 専門科目では、広い視野のもとに教育における理論と実践に対する理解を深めるとともに、自らの専門性を高め、高度な知識と能力を養います。
2. 臨床教育研究および学校実践研究では、自らの専門性を教育現場で理論的・実践的に応用していく能力を養います。
3. 特別研究では、修士課程で学んだことを統合し、修士論文作成に向けて自ら設定した研究課題を深く追究する能力を養います。

(資料 I-9: 専門職学位課程における理論と実践との往還・融合に配慮した授業科目の例)

授業科目名	授業の概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次
教育課程	教育課程・指導支援法開発論 a 児童生徒の理解を促す指導支援の内容・方法の開発と教育課程の編成について、具体的に学ぶ。特に、次の 2 点を重視する。 ・教育課程を考えるための諸要素について、基本的な知識を与える ・学校教育の現場で出会う様々な状況に対応するための基本的な視点を与える。(現職教員対象)	2	(2)	講義・演習	1
	教育課程・指導支援法開発論 b 児童生徒の理解を促す指導支援の内容・方法の開発と教育課程の編成について、具体的に学ぶ。特に、次の 2 点を重視する。 ・教育課程を考えるための諸要素について、基本的な知識を与える ・確かな授業力を身につけるための基本的な視点を与える。(ストマス対象)	2	(2)	講義・演習	1



学級・学校経営	学級・学校経営研究A (学校マネジメント基礎)	学校と教員の観点からこれまでの教育活動について振り返りつつ、地域から信頼される学校経営のための基礎的事項として、学校組織マネジメント、危機管理(リスク/クライシスマネジメント)、諸機関との連携による生徒指導、今日的な教育課題(防災教育)について学ぶ。地域教育機関の訪問調査研究もとりいれる。	2	(3)	講義・演習	1
	学級・学校経営研究B (学校マネジメント習熟)	健全な学校経営のための必須事項として、学校コンプライアンス、人材育成、危機管理(リスク/クライシスマネジメント)、カリキュラムマネジメント、キャリア教育、地域協働型の学校経営について、事例に基づきながら考察する。	2	集中	講義・演習	1
	学級・学校経営研究C (学校マネジメント発展)	地域社会から信頼される学校経営のために、地方教育行政の理解、児童生徒理解、学力向上のための組織づくり、学校安全、地域教育機関の実態について学び、地域協働による包括的な生徒指導体制の構築モデルを検討する。	2	(3)	講義・演習	1
	学級・学校経営研究D (初歩)	学級経営の基礎的事項および技術を事例とともに学習する。主として、教職に対する社会的要請と法令理解をふまえ、学級・学年経営、生徒指導、学校行事、地域連携、子ども理解についてとりあげる。	2	(2)	講義・演習	1

教職大学院『履修のしおり』講義要目抜粋

養成しようとする人材像に関しては、修士課程では、主に学部段階からの継続教育を想定し、特定の分野に関する深い学問的知識・能力を有し、理論的・実践的研究を通じて教育現場における今日的な課題の解決に寄与しうる教員の養成を目指している。そのために、特定の分野に関する理論研究を深めるとともに、そうした成果を学校現場での今日的課題の解決に還元することを意図し、「臨床教育研究・学校実践研究」という教育実践を伴う授業科目の充実と実質化に取り組んでいる(資料Ⅰ-10: 修士課程における『臨床教育研究』の刊行)。したがって、こうした授業においては、教科専門担当教員と教科教育担当教育とがチームを組んで指導にあたりるとともに、学校現場など学外での演習・実習を通じた主体的な学習活動を積極的に取り入れることに配慮している。それに対して、専門職学位課程では、教職としての高度の実践力・応用力を備え、ミドルリーダーとして指導的役割を果たしうる教員の育成、および将来のミドルリーダーを視野に入れながら学部段階で修得した教職としての専門性を高めつつ教育現場で生じている諸課題を実践的に解決しうる資質を備えた教員の育成を目指している。そのために、「学校における実践研究」や「実践適応と評価・分析論 A・B」など、理論と実践との往還・融合を意図したカリキュラムを提供している(資料Ⅰ-11: 専門職学位課程における理論と実践との往還を基本とした履修スケジュール)。また、各院生の研究指導においては、教育現場における実践的・総合的な課題に対応できるよう、院生一人ひとりに複数の指導教員から構成される「教員ユニット」を設け、複数の研究者教員および実務家教員の協働で取り組んでいる。

(資料 I -10 : 修士課程における『臨床教育研究』の刊行)

「臨床教育研究」編集要項

1. 【名称】

宮城教育大学大学院教育学研究科修士課程の授業科目「臨床教育研究」を担当する教員（以下各年度の「臨床教育研究グループ」）は、授業の成果として受講生による作品（著作物）を中心にした報告書を発行する。報告書の名称は「臨床教育研究」とする。

2. 【発行回数】

「臨床教育研究」は原則として年1回発行する。

3. 【内容】

授業において報告されたもの、試みられた活動の記録、成果の概要および評価、等、当該年度の授業科目「臨床教育研究」に関わるものとする。

4. 【内容の責任】

原稿は完成原稿とし、その内容上の責任は著者と、当該授業担当者が負う。

5. 【執筆者】

次の者が執筆できる。

- 1) 「臨床教育研究グループ」（当該年度の授業担当者）、および受講者。
- 2) 授業の中で試みられた活動に関わった者。
- 3) その他、編集委員が認めた者。

6. 【原稿締切】

授業期間が終了した後、各授業担当者はすみやかに原稿を提出しなければならない。授業終了後1週間をめやすとする。

7. 【編集および編集委員】

「臨床教育研究」の編集および発行に関する事項は、当該年度「臨床教育研究グループ」の中から選出された「臨床教育研究」編集委員が処理する。

8. 【実施】

この要項は、平成15年10月1日から実施する。

「臨床教育研究」第26号（2016年3月発行） 目次

臨床教育研究 C

はじめに	1
附属小学校の公開研究会での授業	1
公開研究会での授業の検討	10
公開研究会での授業改善案	12

臨床教育研究 E

まえがき	21
「雲がすじ状になる仕組みを知ろう」	22

「高い木の上の葉まで運ぶしくみを学ぼう」・・・・・・・・・・・・・・・・・・	39
2015 日本理科教育学会発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	62
臨床教育研究を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70～81
<b>臨床教育研究 F</b>	
仙台市立東六郷小学校での活動報告（その3）	
—東日本大震災で被災した小学校での音楽支援を通して—	
はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	83
仙台市立東六郷小学校第5・6学年音楽科授業実施報告・・・・・・・・・・	84
仙台市立東六郷小学校第1・3・4学年音楽科授業実施報告・・・・・・・・	93
仙台市立東六郷小学校 全学年 音楽科授業実施報告・・・・・・・・・・	103
仙台市立東六郷小学校 第6学年 音楽科授業案・・・・・・・・・・	109
半期の活動を通しての振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・・	105～118
<b>臨床教育研究 J</b>	
MUEs(Multi-User Evaluation system)を用いた、若手講師の授業の変容評価	
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	119～128



本学附属図書館では、従来からこれまでに提出された修士論文を閲覧できるコーナーを設けるとともに、情報検索に関する講習会を頻繁に開催することなどを通して、最先端の情報を活用しながら修士論文作成に生かせるように努めている。また、過去の教科書や指導書などをはじめとした教育実践に関する資料を閲覧できる資料室を設置している。さらに、平成 22 年度から実施してきた読書推進活動を拡大・発展させる形で、平成 26 年 4 月に「スパイラル・ラボ」をオープンするとともに、同年 10 月には「シンキング・ブース」および「プライベート・ラボ」といった各施設を新たに開設した。修士課程では、「ティー

チング・アシスタント」として学部学生の学習支援に取り組んでいる大学院生も多く、こうした「教えることによって学ぶ」取り組みが院生自身の主体的な学習を促すことに寄与している（資料Ⅰ－12：修士課程大学院生のティーチング・アシスタント実績）。一方、専門職学位課程では、各院生の研究状況・成果の報告会を2年間に4度実施し、全教員・全院生が研究成果を共有するとともに、学外からの参加者に研究成果を公表する機会ともなっている。また、「応用実践研究Ⅱ・Ⅲ」では現職教員の研究授業の一般公開を奨励するなど、研究成果をさまざまな形で地域に公開している。このほか、修士論文と同様、研究成果の集大成としてのリサーチペーパーと教材ミュージアムを附属図書館で閲覧可能にしている（資料Ⅰ－13：専門職学位課程におけるリサーチペーパー資料）。

（資料Ⅰ－12：修士課程大学院生のティーチング・アシスタント実績）

ティーチング・アシスタント採用数（各年度末現在）					
平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
32	19	21	30	25	24

（資料Ⅰ－13：専門職学位課程におけるリサーチペーパー資料）

平成27年度 教職大学院2年次研究成果発表会（リサーチペーパー最終報告会）研究テーマ一覧

第1グループ

ページ	氏名 (所属班)	研究テーマ
1	(教科指導)	海洋生物を用いた教材開発
3	(学級・学校経営)	自らの生き方を探究し、地域を支える生徒の育成 ～地域協働による志教育を通して～
5	(学校教育・教職)	学びに向かう姿勢をはぐくむ「志教育」の研究 ～「学び合い」と「振り返り」を活かした授業づくりを通して～
7	(教科指導)	苦手意識の回避・克服を目指した英語科授業づくり ～書く活動の指導法の工夫～
9	(学校教育・教職)	中学校区を軸とした防災教育の確立
11	(教育課程)	「社会的な見方や考え方を育む授業の在り方」 ～歴史分野の教材開発を通して～
13	(教育相談)	教育上特別な配慮が必要な児童の支援のあり方 —学級経営と支援をつなぐ方法を探る—
15	(教育課程)	個の考えを豊かにし、学びを集団で共有できる指導法の工夫 ～「読んでわかる力」を育む授業における小集団学習の効果～
17	(教科指導)	中学校理科における放射線教育の課題と対応
19	(学級・学校経営)	学ぶ意欲を高める中学校社会科の授業づくり ～「人間の尊重と日本国憲法」を題材として～
21	(学校教育・教職)	高等学校公民科における問題解決的な授業づくり ～知識技能を活用する力を育むために～
23	(教科指導)	植物学習教材の開発及び授業づくり —ゲランガムの有用性の検討と実践を通して—

25	(教育課程)	作りたいものを作り上げる子どもにするために
27	(教科指導)	小学校理科における栽培・飼育の充実
第2グループ		
ページ	氏名 (所属班)	研究テーマ
29	(教育相談)	高等学校に求められる特別なニーズのある生徒への支援 —個別の指導計画の作成を通して—
31	(教科指導)	学校外国語活動の実践的指導力を高める研究 ～絵本の読み聞かせを通して、コミュニケーション能力の素地の育成を目指す～
33	(教科指導)	「やればできる」の「学習観」をはぐくむ英語科授業づくり ～授業と家庭学習のつながりを通して～
35	(学級・学校経営)	「主体的に活動ができる集団の育成」 ～体育科でのかかわりを通して～
37	(教育相談)	通常の学級に在籍する発達障害等のある児童への指導のあり方 ～ユニバーサルデザインを目指した国語科「読むこと」の授業改善～
39	(教科指導)	多方面への接続を実感させる数学の授業及び教材作成 —自然科学分野等への有用性を意識して—
41	(教育課程)	『読んで分かる力』を育むための国語科の授業 ～主体的な活動を通して～
43	(教育課程)	地理的・歴史的・公民的な観点を踏まえた社会科の学習
45	(教科指導)	中学校家庭科における領域横断的な教材の探究 —「チョコレート」を通じて—
47	(教科指導)	飼育・観察を通じた生物教材の検討
49	(学級・学校経営)	学びの連続性による効果的な中学校技術・家庭科(技術分野)の授業づくり —4分野を関連付けた教材の工夫と指導—
51	(教科指導)	中学校理科における視認性を重視した教材開発 ～身の周りの現象を活用した経験蓄積型教材の開発と利用～
53	(教育課程)	考えを伝え合い課題を解決する力を育てる算数科の授業づくり —作業的・体験的な算数的活動を取り入れて—
55	(学級・学校経営)	相手の気持ちになって物事を考え,自分の気持ちを伝えられる児童を育む ～アサーションから自己表現法を考える～

(水準)期待される水準にある

(判断理由)

教育学研究科では、前述したように理論と実践との往還を基本としながら、教育内容・方法において工夫を重ねてきている。その際に、教員間の協働体制の整備に努めている。修士課程では、教科専門担当者と教科教育担当者との間での協働による授業運営の充実に

努めており、一方、専門職学位課程の授業では、研究者教員と実務家教員とのティーム・ティーチングが基本となっており、大学院生も含めた「学びの共同体」の構築を通して、高度専門職業人の育成に意を注いでいる。

(資料 I - 14 : 専門職学位課程におけるカリキュラムの体系性)								
授業科目		単位	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考		
						教育経営コース	授業力向上コース	共通
教育課程	「子どもの学習指導」教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上 選択必修	4単位以上 選択必修	20 単位以上 選択必修
	「子どもの生活と行動」教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1			
	教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1			
教科指導	「子どもの学習指導」実態把握論A	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上 選択必修	2単位以上 選択必修	
	「子どもの学習指導」実態把握論B	2	(2)	講義・演習	1		2単位以上 選択必修	
	「子どもの学習指導」実態分析論A	2	(2)	講義・演習	1			
	「子どもの学習指導」実態分析論B	2	(2)	講義・演習	1~2			
教育相談	「子どもの生活と行動」実態把握論	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上 選択必修	2単位以上 選択必修	
	「子どもの生活と行動」実態分析論	2	(2)	講義・演習	1			
学級・学校経営	学級・学校経営研究A (学校マネジメント基礎)	2	(3)	演習・実習	1	4単位以上 選択必修	2単位以上 選択必修 (現職教員)	
	学級・学校経営研究B (学校マネジメント習熟)	2	集中	講義・演習	1			
	学級・学校経営研究C (学校マネジメント発展)	2	(3)	演習・実習	1			
	学級・学校経営研究D (初歩)	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		
学校教育・教職研究	学校教育・教職研究A (防災教育)	2	(2)	講義・演習	1	4単位以上 選択必修	2単位以上 選択必修 (現職教員)	
	学校教育・教職研究B (地域協働)	2	(2)	講義・演習	1			
	学校教育・教職研究C (リーガルマインド)	2	(2)	講義・演習	1			
	学校教育・教職研究D (初歩)	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		
	学校教育・教職研究E (初歩)	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		
教科・領域専門バックグラウンド科目群	教育学特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグラウンド科目群 から8単位以上選択必修		
	教育学特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2			
	教育史特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2			
	教育史特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2			
	教育内容・方法特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2			
	臨床心理学特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2			
	発達心理学特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2			
	幼児教育特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2			
	幼児教育特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2			
	環境教育情報特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2			
	環境教育情報特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2			
	環境保全特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2			
	環境保全特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2			
	環境教育実践特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2			

教科・領域専門バックグラウンド科目群	環境教育実践特論・特演 B	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグラウンド科目群 から 8 単位以上選択必修
	自然環境教育特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	視覚障害教育特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	発達障害教育特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	聴覚・言語障害特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国語学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	漢文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国語科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	歴史学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	地理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	法学・政治学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	経済学・社会学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	哲学・倫理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	社会科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	解析学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	代数学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	幾何学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	数学科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	物理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	化学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	生物学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	地学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	理科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	声楽特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	器楽特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	作曲特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	指揮特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	音楽学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	音楽科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	絵画特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	デザイン・工芸特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	彫刻特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	美術史・美術理論特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	美術科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	教育保健学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	運動学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	体育学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	保健体育科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	電気特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
機械特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
木材加工特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
栽培特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
食物学特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
被服学特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
住居学特講	2	(2)	講義・演習	1・2		

教科・領域専門バックグラウンド科目群	保育学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグラウンド科目群から8単位以上選択必修		
	情報特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	生活系教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英語学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英米文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英語科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
実践的指導	小学校英語活動特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	実践適応と評価・分析論A	2	(2)	演習	1			必修
	実践適応と評価・分析論B	2	(2)	演習	2			必修
	臨床教育総合研究A	2	集中	実習	2			必修
学校における実践研究	臨床教育総合研究B	2	集中	実習	2			必修
	基礎実践研究Ⅰ	2	集中	実習	1	①又は②のどちらか一方を選択必修	必修 必修	
	基礎実践研究Ⅱ	2	集中	実習	1			
	応用実践研究Ⅰ	2	集中	実習	1			
	応用実践研究Ⅱ	2	集中	実習	2			
応用実践研究Ⅲ	2	集中	実習	2				

教職大学院『履修のしおり』教育課程表



## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点 学業の成果

(観点に係る状況)

修士課程では、在籍者数に対する修了者数の割合および修了者が取得した単位数については、下記の資料Ⅱ－１の通りである。修士号の学位の取得率については、平成23年度を除いて各年度とも概ね90%前後で推移し、高い水準を維持してきている。また、修了者が取得した単位数についても、必要修得単位数である30単位を超えて取得している学生の割合が50%前後を占めている(資料Ⅱ－１：修士課程における修了者数状況と取得単位状況)。一方、専門職学位課程では、在籍者数に対する修了者数の割合および学位の取得率については、各年度とも概ね92%前後で推移し、修士課程と同様に高い水準を維持してきている。また、単位取得状況についても、それぞれの科目群ごとの取得率はほぼ100%という高い水準を維持してきている(資料Ⅱ－２：専門職学位課程における取得単位状況)。

(資料Ⅱ－１：修士課程における修了者数状況と取得単位状況)

年 度	区分	専攻 専修	特別 支援 教育	教科教育								合計	
				国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健 体育	生活		英語
25	在籍者数		2	6	4	3	3	3	5	3	6	4	39
	取得者数(修了者数)		2	5	4	3	1	3	5	3	6	3	35
	修了者割合(%)		100	83.3	100	100	33.3	100	100	100	100	75	89.7
	取得単位数 分布	30	2	1		1	1		4	3	3		15
		31～33		4	1	2			1		1		9
34以上				3			3			2	3	11	
26	在籍者数		2	5	2	1	7	3	2	0	3	2	27
	取得者数(修了者数)		2	5	2	1	5	3	2	0	3	2	25
	修了者割合(%)		100	100	100	100	71.4	100	100	0	100	100	92.6
	取得単位数 分布	30	2	4			5	1	2		1	1	16
		31～33		1	1			2					4
34以上				1	1					2	1	5	
27	在籍者数		4	2	0	3	7	2	4	0	3	4	29
	取得者数(修了者数)		3	2	0	3	7	2	4	0	3	3	27
	修了者割合(%)		75	100	0	100	100	100	100	0	100	75	93.1
	取得単位数 分布	30	3	2			6		1		1		13
		31～33				3	1		1		1	2	8
34以上							2	2		1	1	6	

(資料Ⅱ－２：専門職学位課程における取得単位状況)

年度	共通科目			バックグラウンド 科目			実践的指導科目			実習					
	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	基礎実践研究			応用実践研究		
										履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %
24	301	296	98%	132	127	96%	119	119	100%	30	30	100%	89	89	100%
25	339	330	97%	148	143	97%	111	109	98%	36	36	100%	84	83	99%
26	302	292	97%	142	134	94%	122	116	95%	28	28	100%	89	88	99%
27	244	232	95%	114	110	96%	113	113	100%	26	26	100%	78	77	99%

※ 人数は延べ人数

大学院生が在籍期間中に履修した授業科目において、成績評価における「S（きわめて優秀な水準に達している）」「A（優れた水準に達している）」「B（ねらい通りの水準に達している）」「C（合格に足る水準に達している）」のそれぞれの割合については、下記の資料Ⅱ－３、資料Ⅱ－４の通りとなっており、良好な状況にある。また、専修免許状の取得者の中で、複数の専修免許状を取得している者も毎年概ね 56%を占めており、意欲的な修学状況が伺える。さらに、修士課程の大学院生の中には、指導教員の所属学会に所属し、自らが学ぶ学問領域における研究成果に関して口頭発表を行ったり、論文としてまとめたりする者もいる。例えば、在籍者数の最も多い理科教育専修の場合、平成 22 年度から 27 年度の 6 年間で、学会で口頭発表及び論文発表を行った大学院生の件数は 120 件にのぼっている。一方、専門職学位課程では平成 22 年度から 27 年度の 6 年間に公開研究授業が 69 件、研究発表が 44 件行われるなど、多くの現職派遣院生がスクールリーダーとしての資質を身につけ、学修の成果を地域に還元している。

(資料Ⅱ－３：修士課程における大学院生の成績評価状況)

\* 上段：在籍院生の総修得単位数 下段：成績評価全体に占める割合 (%)

	専門教育科目				実践系科目				特別研究			
	S	A	B	C	S	A	B	C	S	A	B	C
22 年度	130	356	30	4	38	98	6	0	48	48	0	0
	25	68.5	5.8	0.8	26.8	69.0	4.2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
23 年度	224	440	46	8	54	136	2	0	76	52	0	0
	31.2	61.3	6.4	1.1	28.1	70.8	1.0	0.0	59.4	40.6	0.0	0.0
24 年度	155	376	38	8	54	92	8	0	36	66	0	4
	26.9	65.2	6.6	1.4	35.1	59.7	5.2	0.0	34.0	62.3	0.0	3.8
25 年度	200	533	70	2	64	140	8	0	80	52	8	0
	24.8	66.2	8.7	0.2	30.2	66.0	3.8	0.0	57.1	37.1	5.7	0.0
26 年度	113	320	78	16	40	76	26	8	28	48	16	8
	21.4	60.7	14.8	3.0	26.7	50.7	17.3	5.3	28.0	48.0	16.0	8.0
27 年度	145	375	60	2	50	100	10	2	40	64	0	4
	24.9	64.4	10.3	0.3	30.9	61.7	6.2	1.2	37.0	59.3	0.0	3.7

(資料Ⅱ－４：専門職学位課程における大学院生の成績評価状況)

\* 上段：在籍院生の総修得単位数 下段：成績評価全体に占める割合 (%)

	専門教育科目				実践系科目				特別研究			
	S	A	B	C	S	A	B	C	S	A	B	C
22年度	208	484	10	0	220	60	0	0	174	54	2	0
	29.6	68.9	1.4	0.0	78.6	21.4	0.0	0.0	75.7	23.5	0.9	0.0
23年度	246	384	42	0	212	52	0	0	172	46	0	0
	36.6	57.1	6.3	0.0	80.3	19.7	0.0	0.0	78.9	21.1	0.0	0.0
24年度	214	390	26	0	148	92	0	0	112	106	10	0
	34.0	61.9	4.1	0.0	61.7	38.3	0.0	0.0	49.1	46.5	4.4	0.0
25年度	200	304	42	2	130	70	6	2	88	104	10	2
	36.5	55.5	7.7	0.4	62.5	33.7	2.9	1.0	43.1	51.0	4.9	1.0
26年度	198	344	48	0	76	154	2	0	70	138	30	0
	33.6	58.3	8.1	0.0	32.8	66.4	0.9	0.0	29.4	58.0	12.6	0.0
27年度	156	378	38	0	104	108	12	0	86	100	36	2
	27.3	66.1	6.6	0.0	46.4	48.2	5.4	0.0	38.4	44.6	16.1	0.9

本学では、学業の成果達成度や授業をめぐる課題を把握しその改善に努めるために、修士課程では「学生による授業評価アンケート」と「修了生アンケート（宮教大の通信簿）」の2つの取り組みを行ってきた。前者の「学生による授業評価アンケート」については、平成19年度から教育学部とほぼ同様な様式で実施してきたが、修士課程においては、教育学部の授業と違ってひとつの授業科目の受講者がきわめて少なく、アンケート回答の匿名性を確保することが難しい等の事情もあり、調査結果の信憑性に疑問の声も出されていた。そこで、平成23年度以降一旦中止して改善策を検討してきた結果、平成26年度から新しい方式で実施することとした。すなわち、「修了生アンケート（宮教大の通信簿）」の一部に、教育内容・方法に関する質問項目を新たに加え、それをもって大学院での授業の評価に替えるという方式を試行的に実施した（資料Ⅱ－５：修士課程における修了生アンケート（宮教大の通信簿）の質問項目）。「専門科目」「実践科目」「研究指導・論文指導」の3つの質問項目については、有用性、目的指向性、総合評価のいずれにおいても高い評価を受けている。また、教育研究活動等に関する自由記述欄においても、肯定的な記述が多いのに対して改善をもとめる記述はほとんど見られなかったことから、数値データにおける満足度を裏付ける結果となっている（資料Ⅱ－６：修士課程における修了生アンケート（宮教大の通信簿）における自由記述の例）。一方、専門職学位課程では、年に2回のアンケートを実施し、授業・実習、研究指導や自らの学習状況について記述式で回答を求めている。また、院生と教員の意見交換会（年2回）を開催し、院生の意見に教員が直接回答するなど率直な意見交換の機会を設けている。これらの結果はそのつど教員会議で報告し、課題の共有と対応に生かしている。

(資料Ⅱ－５：修士課程における修了生アンケート(宮教大の通信簿)の質問項目)

- ・本学大学院を志望した動機
- ・教育研究活動等について(修士課程の専門科目、修士課程の実践科目、修士課程の研究指導・論文指導)
- ・学業の達成について
- ・サポート体制(勉学、就職、学生生活)について
- ・大学生活について(授業時間外の学習・研究、環境満足度)
- ・総合評価

(資料Ⅱ－６：修士課程における修了生アンケート(宮教大の通信簿)における自由記述の例)

■教育研究活動等について高く評価できる点があれば具体的に記述してください。

- ・無理のないカリキュラムなので、研究や自主学習に費すことのできる時間が多く、自分の意志で学習を進めることができる。
- ・教員に必要な技能・資質の習得だけでなく、学術的研究の手法・基礎を学ぶことができてよかった。
- ・学会等への参加の際に、有意な指導を受けることができた。
- ・物理、化学、生物、地学、理科教育の全てを授業で学ぶことができる点  
フィールドワークなど、90分内では行えない活動を経験することができる点
- ・専門を超えて、同じ特別支援教育講座のどの先生方からも手厚く指導して頂いたり、時には悩み相談もきいて頂いたりした点です。先が見通せない研究活動の励みになりました。
- ・教授陣の専門的な指導、レッスンを受けることができた。
- ・学生の少人数さ故、個に合った指導を受けることができた。

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

大学院生の履修状況は、修士課程、専門職学位課程のいずれにおいても一貫して高い水準を維持してきている。少人数教育を基本としたマンツーマン方式のキメの細かい指導体制がその背景にあるものと考えられるが、その一方で、教員養成に特化した専門性の高い教員養成系の大学院教育の成果ともいえる。また、大学院生の学業に対する成果達成度や満足度においても、高い評価を受けている状況から、期待される水準を上回ると判断できる。

(資料Ⅱ－７：修士課程における修了生アンケート(宮教大の通信簿)の結果)

○教育研究活動等について

修士課程の専門科目

(1) 授業の目標・ねらいは明確だった。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	12	8	1	1

(2) 授業が自分の将来（教職等）や研究に生きると思う。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	16	5	1	0

(3) 総合的に判断して授業を高く評価できる。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	13	8	1	0

#### 修士課程の実践科目（臨床教育研究と学校実践研究）

(1) 授業の目標・ねらいは明確だった。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	15	6	0	1

(2) 授業が自分の将来（教職等）や研究に生きると思う。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	16	4	1	1

(3) 実践に役立つ教育及び研究指導が行われていた。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	11	7	2	2

(4) 総合的に判断して授業を高く評価できる。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	13	6	2	1

#### 修士課程の研究指導・論文指導

(1) 研究指導・論文指導が自分の将来（教職等）や研究に生きると思う。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	17	5	0	0

(2) 研究指導・論文指導は、自身の学習や研究の目的に沿っていた。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	18	4	0	0

(3) 総合的に判断して研究指導・論文指導を高く評価できる。

	1:そう思う	2:どちらかと言え ばそう思う	3:どちらかと言え ばそう思わない	4:思わない
計	17	5	0	0

平成 27 年度修了生アンケート結果

<b>観点 進路・就職の状況</b>
--------------------

(観点に係る状況)

修了者数の中で教職に就いた者の割合(教員就職率)は、修士課程では各年度とも概ね50%~60%で推移してきており、国立の教員養成系大学での大学院機能の役割を一定程度果たしているといえる。こうした教職に就いた修了生の校種別の状況については、公立の中等学校に就職した者の割合が平成26年度を除いて50%から70%で推移しており、この校種での教員養成の高度化に貢献している。また、専門職学位課程(現職派遣教員の復職も含む)では平成26年度を除いて各年度とも概ね100%の高い水準を維持してきており、高度専門職業人の育成に貢献してきている。こうした教職に就いた修了生の校種別の状況については、義務教育諸学校に就職した者の割合が常に75%を超えており、この校種での高度専門職業人の育成に貢献してきている。さらに、就職先の地域別の状況については、修士課程においては、宮城県を除く東北5県への就職が10%から30%を占めており、一方専門職学位課程においても、宮城県を除く東北5県への就職が平成22年度を除いて10%前後で推移してきており、宮城県を中心としながら東北地方全域に向けて教職としての高度な専門性を有した人材を輩出しており、広域拠点型大学としての使命を果たしている(資料Ⅱ-8:修士課程および専門職学位課程の修了生の就職状況)。

(資料Ⅱ-8:修士課程および専門職学位課程の修了生の就職状況)

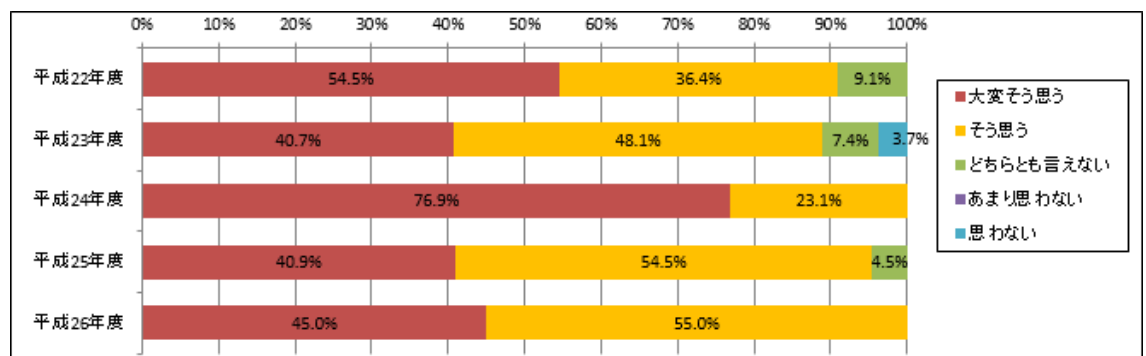
課程		修士課程					専門職学位課程				
年度		H22	H23	H24	H25	H26	H22	H23	H24	H25	H26
修了生数		23	32	26	35	25	35(5)	33(5)	30(12)	26(12)	29(16)
教員就職者数		13	17	16	19	13	35(5)	33(5)	29(11)	26(12)	24(11)
教員就職率(%)		56.5	53.1	61.5	54.3	52.0	100.0 (100.0)	100.0 (100.0)	96.7 (91.7)	100.0 (100.0)	82.8 (68.8)
校種別	公立小学校	2	3	0	5	4	18(1)	15(2)	14(5)	14(7)	11(6)
	公立中学校	7	4	5	7	2	7(2)	10(2)	9(3)	6(1)	7(2)
	公立高等学校	2	5	4	4	2	4(1)	5(1)	3(1)	0(0)	3(2)
	公立特別支援学校	1	1	2	1	2	4(0)	2(0)	0(0)	2(1)	0(0)
	私立学校	1	3	4	0	1	1(1)	0(0)	1(1)	2(2)	1(1)
	その他	0	1	1	2	2	1(0)	1(0)	2(1)	2(1)	2(0)
地区別	宮城県	10	10	12	13	9	30(2)	28(3)	24(7)	20(7)	20(9)
	宮城県以外の東北5県	2	4	4	2	2	4(2)	3(0)	2(1)	3(2)	2(1)
	その他地方	1	3	0	4	2	1(1)	2(2)	3(3)	3(3)	2(1)

前述した修士課程の修了者を対象とした「修了生アンケート(宮教大の通信簿)」について、「学業の達成」という質問項目においては、「専門分野の研究能力、技術が身についた」および「教育実践者として有効な能力が身についた」「実践に関わる課題解決能力が身につ

いた」のいずれにおいても、3分の2を超える院生が「大変そう思う」「そう思う」と回答しており、修士課程における「養成したい教員像・人材像」として挙げている「理論的・実践的研究を通じて教育現場における今日的な課題の解決に寄与しうる教員」の養成を達成できているといえる。中でも特に、「専門分野の研究能力、技術が身についた」においては、9割を超える院生が「大変そう思う」「そう思う」と回答しており、「特定分野に関する深い学問的知識・能力」が実践的指導力と往還する形で獲得できている状況がうかがえる（資料Ⅱ－9：修了生アンケート（宮教大の通信簿）から見てきた「学力の達成」における満足度）。また、平成19年度から「キャリアサポートセンター」が行っている「学校訪問調査」の中で、修士課程を修了した者については、「使命感や責任感、教育的愛情等」「社会性や対人能力」「児童生徒理解や学級経営等」「教科内容等指導力」のいずれの項目においても、就職先から高い評価を得ている。一方、専門職学位課程では、年2回の学生アンケートを修了直前にも実施し、2年間の学修をふりかえるとともに、大学への意見等を把握している。この記述からは、現職教員・ストレートマスターともに多くの学生が、2年間の学修を有意義だと受けとめている（資料Ⅱ－10：専門職学位課程における学生アンケートの調査結果）。また、平成27年度には修了生に対するアンケート調査を試行的に実施し、高い評価を得ている。

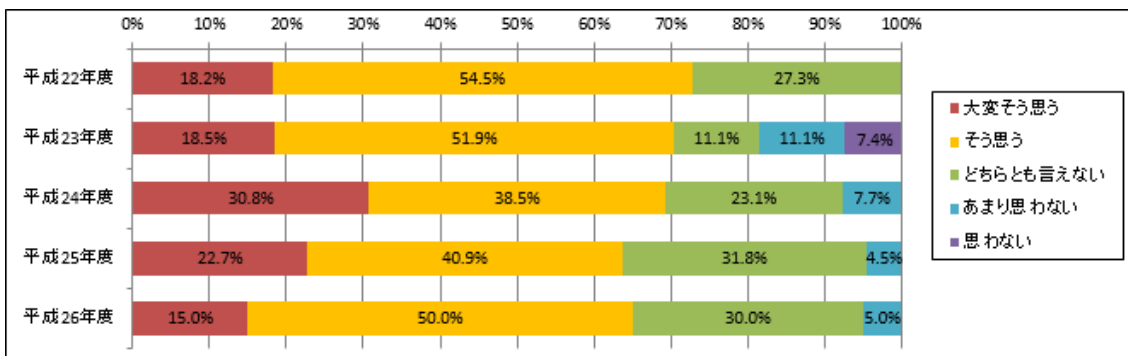
（資料Ⅱ－9：修了生アンケート（宮教大の通信簿）から見てきた「学力の達成」における満足度）

（1）専門分野の研究能力又は技術が身についた



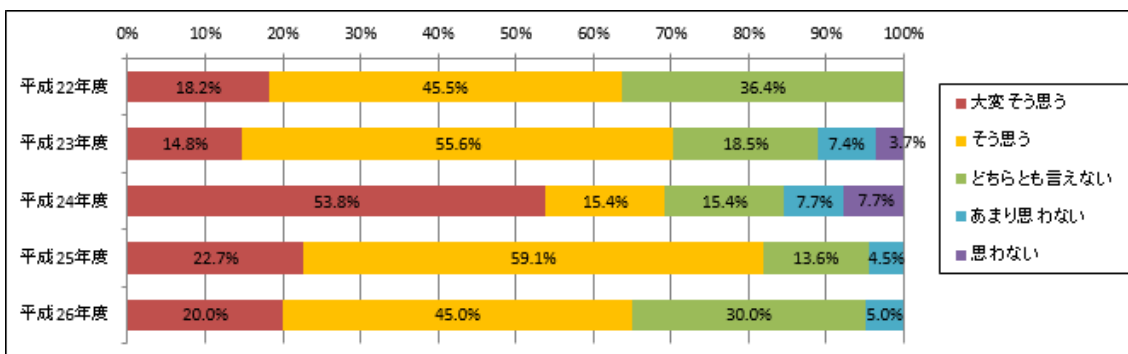
年度		大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない	計
平成22年度	人数	6	4	1	0	0	11
	%	54.5%	36.4%	9.1%	0%	0%	
平成23年度	人数	11	13	2	0	1	27
	%	40.7%	48.1%	7.4%	0%	3.7%	
平成24年度	人数	10	3	0	0	0	13
	%	76.9%	23.1%	0%	0%	0%	
平成25年度	人数	9	12	1	0	0	22
	%	40.9%	54.5%	4.5%	0%	0%	
平成26年度	人数	9	11	0	0	0	20
	%	45.0%	55.0%	0%	0%	0%	

(2) 教育実践者として有効な能力が身についた



年度	人数	大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない	計
平成22年度	2	6	3	0	0	11	
	%	18.2%	54.5%	27.3%			
平成23年度	5	14	3	3	2	27	
	%	18.5%	51.9%	11.1%	11.1%	7.4%	
平成24年度	4	5	3	1	0	13	
	%	30.8%	38.5%	23.1%	7.7%		
平成25年度	5	9	7	1	0	22	
	%	22.7%	40.9%	31.8%	4.5%		
平成26年度	3	10	6	1	0	20	
	%	15.0%	50.0%	30.0%	5.0%		

(3) 実践に関わる課題解決能力が身についた



年度	人数	大変そう思う	そう思う	どちらとも言えない	あまり思わない	思わない	計
平成22年度	2	5	4	0	0	11	
	%	18.2%	45.5%	36.4%			
平成23年度	4	15	5	2	1	27	
	%	14.8%	55.6%	18.5%	7.4%	3.7%	
平成24年度	7	2	2	1	1	13	
	%	53.8%	15.4%	15.4%	7.7%	7.7%	
平成25年度	5	13	3	1	0	22	
	%	22.7%	59.1%	13.6%	4.5%		
平成26年度	4	9	6	1	0	20	
	%	20.0%	45.0%	30.0%	5.0%		

(資料Ⅱ-10：専門職学位課程における学生アンケートの調査結果)

(現職教員回答)

- ・1年次、今日的な教育課題とその解決案についてレポートを何本か書きました。そのおかげで、事象を多角的に見る力が身に付いたと思います。個人研究で作成した教材や資料も現場の実態に合わせて活用しています。研究主任をしています。指導主事訪問での指導主事からの校内研究に対する指導・助言は、ほぼパーフェクト・ゲームでした。
- ・職場において、組織体制で動く際に周囲をまとめることができた。また、理論的分析が教材研究等に役立った。
- ・学校訪問や施設見学など、現場にいる時にはできなかったことができ、現在現場に戻っていろいろな情報を収集できたと実感できている。



(ストレートマスター回答)

- ・現職の先生方と共に学ぶことで、学生の立場では知り得ないことが、普段の会話の中や授業のディスカッション場面で知ることができた。
- ・実習が多くあることで学校現場にいることの出来る時間が多い。そのことによって生徒や教師の姿を長いスパンで目にすることができた。

(出典：平成 27 年度（前期）教職大学院に関するアンケート集計結果（平成 27 年 9 月 30 日 教員会議資料）)

(水準) 期待される水準にある

(判断理由)

専門職学位課程においては、教員就職率が 100%に達する年度が多くあり、また、修士課程においては、教員就職率は 50%～60%で推移してきており、しかも就職先で宮城県を除く東北 5 県への就職が 10%から 30%を占めており、広域拠点型大学としての機能も果たしている状況が認められる。さらに、修了生に対する就職先からの評価も高い評価を得ており、専門職学位課程における現職派遣教員の復職後の地位をみても、スクールリーダーとして地域の教育向上に貢献している姿が認められる（資料Ⅱ－11：専門職学位課程における現職派遣教員の復職後の地位）。

(資料Ⅱ－11：専門職学位課程における現職派遣教員の復職後の地位)

	校長	教頭	指導主事・ 主幹教諭等	研究主任・ 教務主任等	修了生(現職教 員)合計
平成 21 年度修了者	1	9	4	2	28
平成 22 年度修了者	0	3	7	4	30
平成 23 年度修了者	0	4	2	2	28
平成 24 年度修了者	0	2	3	1	18
平成 25 年度修了者	0	1	4	2	14
平成 26 年度修了者	0	0	0	1	13

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

##### 事例1：キャリア育成オフィスの設置について

専門職学位課程では、「理論と実践の往還・融合」を具体化するための方策として、平成25年度に「キャリア育成オフィス」を設置した。主としてストレートマスターが附属校園およびその他の学校において見学・観察や授業実践を日常的・継続的に行う機会を充実させることがねらいである。附属学校に学生の活動拠点を設けるとともに、配置された2名のコーディネーターが学生の課題や研究テーマと学校側の事情を調整し、大学側の研究指導教員とともに指導を行うことで、学生の研究の深化と実践的指導力の向上につながっている。こうした取り組みは、本学の大学院教育学研究科が永年にわたって希求してきた「臨床の学」による「理論と実践との往還・融合」の理念を具体化していく方策の一つであり、この面での質的な向上を示す事例といえる。将来的には修士課程に対象を拡大することも検討中である。

#### (2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

##### 事例2：専門職学位課程におけるスクールリーダーの養成について

専門職学位課程へ入学した現職派遣教員は、終了後に全員が元の職場に復帰している。修了生の在職状況については、平成21年度修了生（1期生）および22年度修了者（2期生）においては、校長1名、教頭12名、指導主事・主幹教諭等11名、研究主任・教務主任等6名となっており、また、平成23年度以降の修了者においても、教頭7名、指導主事・主幹教諭等9名、研究主任・教務主任等6名となっており、復職後に多くの修了生がスクールリーダーとして指導的役割を果たしている。さらに、大学院での研究の成果を生かし、所属校における教育研究活動の成果をまとめた論文が公募論文として受賞するなどの例も多くみられ、研究成果が地域へ還元され、影響を与えている状況がうかがえる。このように、修士課程において従来から現職派遣教員を受け入れてきた状況と比べても、専門職学位課程（教職大学院）においては、スクールリーダーの養成という面で明らかに質的な向上がみられた。

教 育

高度教職実践専攻

( 別 添 資 料 )

## 目 次

専門職学位課程におけるオリエンテーション ・ガイダンスを導入した入試	1
大学院教育学研究科にかかわるFD研修会の テーマ一覧	2
教職大学院認証評価における自己点検評価 報告書の目次	2
修士課程と専門職学位課程のディプロマ・ポリシー	3
専門職学位課程におけるカリキュラムの体系性	3
専門職学位課程における理論と実践との往還 ・融合に配慮した授業科目の例	6
専門職学位課程における理論と実践との往還を 基本とした履修スケジュール	7
専門職学位課程におけるリサーチペーパー資料	7
専門職学位課程における取得単位状況	9
専門職学位課程における大学院生の成績評価状況	9
専門職学位課程における学生アンケートの調査結果	10
専門職学位課程における現職派遣教員の復職後の地位	10

## 宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

### （専門職学位課程におけるオリエンテーション・ガイダンスを導入した入試）

#### 平成28年度教職大学院入学前オリエンテーション・ガイダンス実施要項

- 1 日 時 平成28年2月20日（土） 10:00～
- 2 場 所 宮城教育大学2号館 221教室  
（集合・全体説明）  
（班別ガイダンス）
- 3 担当者 教職大学院専任教員全員
- 4 内 容
  - (1) 【全体オリエンテーション・ガイダンス】（10:00～10:30）
    - ① 教務部会長あいさつ
    - ② 専任教員の紹介
    - ③ 研究テーマと指導體制
    - ④ 教員ユニットの編成について
    - ⑤ 入学前の準備等について
    - ⑥ その他
  - (2) 【班別オリエンテーション・ガイダンス】（10:30～11:00）  
入試時の研究テーマをもとに、下記i)～v)の班(仮)に分かれて面談・意見交換を行う。
    - i) 教育課程の編成・実施
    - ii) 教科等の指導體法
    - iii) 生徒指導・教育相談
    - iv) 学級経営・学校経営
    - v) 学校教育と教職のあり方
  - (3) 【ストレートマスター修学相談会（全員）】（11:10～12:10）  
【現職教員修学相談会（希望者）】（11:10～）  
【学校における実践研究免除申請者の授業ビデオまたは模擬授業による評価】（11:10～）

#### 平成28年度 教職大学院新入生オリエンテーション・ガイダンス 実施要項

- 1 日 時 平成28年4月7日（木） 13:30～16:20
- 2 場 所 宮城教育大学6号館2階 教職大学院教育実践研究室
- 3 内 容
  - (1) 教職大学院専任教員・大学院教務係員紹介 13:30～
  - (2) 「履修のしおり」の説明について 14:00～
  - (3) 諸連絡等 14:50～
  - (4) 班別オリエンテーション（会場：各班教員の指示のとおり移動）15:00～16:20  
【班別オリエンテーション説明者】
    - ・教育課程班（吉村教授）
    - ・教科指導班（村松教授）
    - ・教育相談班（佐藤教授）
    - ・学級・学校経営班（本図教授）
    - ・学校教育・教職班（平教授）

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

- 【1】 研究テーマの絞り込み
- 【2】 履修授業科目（共通5科目、バックグラウンド科目）の絞り込み
- 【3】 指導体制と修学指導（履修相談）
- 【4】 施設等ガイダンス（施設見学：院生研究室、附属図書館、保健管理センター等）

（大学院教育学研究科にかかわるFD研修会のテーマ一覧）

年度	実施日	内容
23年度	23.10.5	大学院修士課程の今後を考える
25年度	25.10.30	教員養成の在り方について－教員養成と大学改革－
	25.12.18	体系的な教員養成カリキュラムの編成とカリキュラムマップ
26年度	26.12.24	修士課程の教育実践に伴う授業科目の改善について
27年度	27.12.21	教員の資質能力向上フォーラム

（教職大学院認証評価における自己点検評価報告書の目次）

教職大学院認証評価  
自己評価書

目次

I	教職大学院の現況及び特徴	1
II	教職大学院の目的	2
III	基準ごとの自己評価	
	基準領域1 理念・目的	3
	基準領域2 学生の受入れ	7
	基準領域3 教育の課程と方法	11
	基準領域4 学習成果・効果	27
	基準領域5 学生への支援体制	34
	基準領域6 教員組織	38
	基準領域7 施設・設備等の教育環境	47
	基準領域8 管理運営	49
	基準領域9 点検評価・FD	56
	基準領域10 教育委員会及び学校等との連携	60

（修士課程と専門職学位課程のディプロマ・ポリシー）

修士課程のディプロマ・ポリシー

1. 高度な専門性をもって、教育を学問として深く追究・実践し、教育現場において今日的な課題の解決に寄与しうる優れた教員・人材として活躍できる知識・能力
2. 教育における理論と実践の研究能力を高め、幅広く教育現場にかかわる能力
3. 生涯にわたって自ら学び続けようとする態度

専門職学位課程のディプロマ・ポリシー

高度教職実践専攻では、所定の単位を修得し、スクールリーダーおよびその候補者としてふさわしい「総合的な教師力」を身につけた者に学位を授与します。

院生がもつ研究課題に対応させた指導体制、教師力育成を図る専攻科目を取り入れた教育課程を整備するとともに、課題解決に向けた研究・研修の場を提供します。



（専門職学位課程におけるカリキュラムの体系性）

授業科目	単位	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考			
					教育経営コース	授業力向上コース	共通	
教育課程	「子どもの学習指導」教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上選択必修	4単位以上選択必修	20 単位以上選択必修
	「子どもの生活と行動」教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1			
	教育課程・指導支援法開発論	2	(2)	講義・演習	1			
教科指導	「子どもの学習指導」実態把握論A	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上選択必修	2単位以上選択必修	
	「子どもの学習指導」実態把握論B	2	(2)	講義・演習	1			
	「子どもの学習指導」実態分析論A	2	(2)	講義・演習	1		2単位以上選択必修	
	「子どもの学習指導」実態分析論B	2	(2)	講義・演習	1~2			
教育相談	「子どもの生活と行動」実態把握論	2	(2)	講義・演習	1	2単位以上選択必修	2単位以上選択必修	
	「子どもの生活と行動」実態分析論	2	(2)	講義・演習	1			
学級・学校経営	学級・学校経営研究A（学校マネジメント基礎）	2	(3)	演習・実習	1	4単位以上選択必修	2単位以上選択必修（現職教員）	
	学級・学校経営研究B（学校マネジメント習熟）	2	集中	講義・演習	1			
	学級・学校経営研究C（学校マネジメント発展）	2	(3)	演習・実習	1			
	学級・学校経営研究D（初歩）	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		
学校教育・教職研究	学校教育・教職研究A（防災教育）	2	(2)	講義・演習	1	4単位以上選択必修	2単位以上選択必修（現職教員）	
	学校教育・教職研究B（地域協働）	2	(2)	講義・演習	1			
	学校教育・教職研究C（リーガルマインド）	2	(2)	講義・演習	1			
	学校教育・教職研究D（初歩）	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		
	学校教育・教職研究E（初歩）	2	(2)	講義・演習	1	ストマス必修		

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

教科・領域専門バックグラウンド科目群	教育学特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグラウンド科目群 から8単位以上選択必修
	教育学特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	
	教育史特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	
	教育史特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	
	教育内容・方法特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	臨床心理学特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	発達心理学特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	幼児教育特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	
	幼児教育特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	
	環境教育情報特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	
	環境教育情報特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	
	環境保全特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2	
	環境保全特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	
環境教育実践特論・特演A	2	(2)	講義・演習	1・2		
教科・領域専門バックグラウンド科目群	環境教育実践特論・特演B	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグラウンド科目群 から8単位以上選択必修
	自然環境教育特論・特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	視覚障害教育特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	発達障害教育特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	聴覚・言語障害特演	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国語学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	漢文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	国語科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	歴史学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	地理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	法学・政治学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	経済学・社会学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	哲学・倫理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	社会科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	解析学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	代数学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	幾何学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	数学科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	物理学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	化学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	生物学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	地学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	理科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	声楽特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	器楽特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	作曲特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	指揮特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	音楽学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
	音楽科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2	
絵画特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
デザイン・工芸特講	2	(2)	講義・演習	1・2		
彫刻特講	2	(2)	講義・演習	1・2		



宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

	美術史・美術理論特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	美術科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	教育保健学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	運動学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	体育学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	保健体育科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	電気特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	機械特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	木材加工特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	栽培特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	食物学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	被服学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	住居学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
教科・領域専門バック グランド科目群	保育学特講	2	(2)	講義・演習	1・2	教科・領域専門バックグランド科目群 から8単位以上選択必修		
	情報特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	生活系教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英語学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英米文学特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	英語科教育特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
	小学校英語活動特講	2	(2)	講義・演習	1・2			
実践的 指導	実践適応と評価・分析論A	2	(2)	演習	1			必修
	実践適応と評価・分析論B	2	(2)	演習	2			必修
	臨床教育総合研究A	2	集中	実習	2			必修
	臨床教育総合研究B	2	集中	実習	2			必修
学校における実 践研究	基礎実践研究Ⅰ	2	集中	実習	1	①又は ②のど ちらか ②一方を 選択必修	必修 必修	
	基礎実践研究Ⅱ	2	集中	実習	1			
	応用実践研究Ⅰ	2	集中	実習	1			
	応用実践研究Ⅱ	2	集中	実習	2			
	応用実践研究Ⅲ	2	集中	実習	2			

教職大学院『履修のしおり』教育課程表

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

（専門職学位課程における理論と実践との往還・融合に配慮した授業科目の例）

授業科目名	授業の概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次
教育課程	教育課程・指導支援法開発論 a	2	(2)	講義・演習	1
	教育課程・指導支援法開発論 b	2	(2)	講義・演習	1
学級・学校経営	学級・学校経営研究 A （学校マネジメント基礎）	2	(3)	講義・演習	1
	学級・学校経営研究 B （学校マネジメント習熟）	2	集中	講義・演習	1
	学級・学校経営研究 C （学校マネジメント発展）	2	(3)	講義・演習	1
	学級・学校経営研究 D （初歩）	2	(2)	講義・演習	1

教職大学院『履修のしおり』講義要目抜粋

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

（専門職学位課程における理論と実践との往還を基本とした履修スケジュール）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1年次	「教育課程」、「教科指導」、「教育相談」、「学級・学校経営」、「学校教育・教職研究」 学外での資料収集、研修会・研究会等への参加												
	教科・領域専門バックグラウンド科目群												
	中間発表会												
	「実践適応・評価分析論A」 学外での資料収集、学校での実践研究等												
	基礎実践研究Ⅰ(10日間) (附属学校園)		基礎実践研究Ⅱ(10日間) (連携協力校等)			応用実践研究Ⅰ(10日間) (連携協力校等)						成果報告会	
2年次	「教育課程」、「教科指導」、「教育相談」、「学級・学校経営」、「学校教育・教職研究」 学外での資料収集、研修会・研究会等への参加												
	教科・領域専門バックグラウンド科目群												
	中間発表会												
	「実践適応・評価分析論B」												
	応用実践研究Ⅱ(10日間) (現職教員：現任教、ストレートマスター：連携協力校)			臨床教育総合研究A			臨床教育総合研究B(教材ミュージアム作成)			応用実践研究Ⅲ(10日間) (現職教員：現任教、ストレートマスター：附属学校園)			最終報告会

（専門職学位課程におけるリサーチペーパー資料）

平成 27 年度 教職大学院 2 年次研究成果発表会（リサーチペーパー最終報告会）研究テーマ一覧

第 1 グループ

ページ	氏名 (所属班)	研究テーマ
1	(教科指導)	海洋生物を用いた教材開発
3	(学級・学校経営)	自らの生き方を探究し、地域を支える生徒の育成 ～地域協働による志教育を通して～
5	(学校教育・教職)	学びに向かう姿勢をはぐくむ「志教育」の研究 ～「学び合い」と「振り返り」を活かした授業づくりを通して～
7	(教科指導)	苦手意識の回避・克服を目指した英語科授業づくり ～書く活動の指導法の工夫～
9	(学校教育・教職)	中学校区を軸とした防災教育の確立
11	(教育課程)	「社会的な見方や考え方を育む授業の在り方」 ～歴史分野の教材開発を通して～
13	(教育相談)	教育上特別な配慮が必要な児童の支援のあり方 —学級経営と支援をつなぐ方法を探る—
15	(教育課程)	個の考えを豊かにし、学びを集団で共有できる指導法の工夫 ～「読んでわかる力」を育む授業における小集団学習の効果～
17	(教科指導)	中学校理科における放射線教育の課題と対応
19	(学級・学校経営)	学ぶ意欲を高める中学校社会科の授業づくり ～「人間の尊重と日本国憲法」を題材として～
21	(学校教育・教職)	高等学校公民科における問題解決的な授業づくり ～知識技能を活用する力を育むために～

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

23	(教科指導)	植物学習教材の開発及び授業づくり ーゲランガムの有用性の検討と実践を通してー
25	(教育課程)	作りたいものを作り上げる子どもにするために
27	(教科指導)	小学校理科における栽培・飼育の充実

第2グループ

ページ	氏名 (所属班)	研究テーマ
29	(教育相談)	高等学校に求められる特別なニーズのある生徒への支援 ー個別の指導計画の作成を通してー
31	(教科指導)	学校外国語活動の実践的指導力を高める研究 ～絵本の読み聞かせを通して、コミュニケーション能力の素地の育成を目指す～
33	(教科指導)	「やればできる」の「学習観」をはぐくむ英語科授業づくり ～授業と家庭学習のつながりを通して～
35	(学級・学校経営)	「主体的に活動ができる集団の育成」 ～体育科でのかかわりを通して～
37	(教育相談)	通常の学級に在籍する発達障害等のある児童への指導のあり方 ～ユニバーサルデザインを目指した国語科「読むこと」の授業改善～
39	(教科指導)	多方面への接続を実感させる数学の授業及び教材作成 ー自然科学分野等への有用性を意識してー
41	(教育課程)	『読んで分かる力』を育むための国語科の授業 ～主体的な活動を通して～
43	(教育課程)	地理的・歴史的・公民的な観点を踏まえた社会科の学習
45	(教科指導)	中学校家庭科における領域横断的な教材の探究 ー「チョコレート」を通じてー
47	(教科指導)	飼育・観察を通した生物教材の検討
49	(学級・学校経営)	学びの連続性による効果的な中学校技術・家庭科（技術分野）の授業づくり ー4分野を関連付けた教材の工夫と指導ー
51	(教科指導)	中学校理科における視認性を重視した教材開発 ～身の周りの現象を活用した経験蓄積型教材の開発と利用～
53	(教育課程)	考えを伝え合い課題を解決する力を育てる算数科の授業づくり ー作業的・体験的な算数的活動を取り入れてー
55	(学級・学校経営)	相手の気持ちになって物事を考え、自分の気持ちを伝えられる児童を育む ～アサーションから自己表現法を考える～

宮城教育大学高度教職実践専攻（別添資料）

（専門職学位課程における取得単位状況）

年度	共通科目			バックグラウンド 科目			実践的指導科目			実習					
	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	基礎実践研究			応用実践研究		
										履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %	履 修 者 数	単 位 取 得 者 数	単 位 取 得 率 %
24	301	296	98%	132	127	96%	119	119	100%	30	30	100%	89	89	100%
25	339	330	97%	148	143	97%	111	109	98%	36	36	100%	84	83	99%
26	302	292	97%	142	134	94%	122	116	95%	28	28	100%	89	88	99%
27	244	232	95%	114	110	96%	113	113	100%	26	26	100%	78	77	99%

※ 人数は延べ人数

（専門職学位課程における大学院生の成績評価状況）

\* 上段：在籍院生の総修得単位数 下段：成績評価全体に占める割合（%）

	専門教育科目				実践系科目				特別研究			
	S	A	B	C	S	A	B	C	S	A	B	C
22年度	208	484	10	0	220	60	0	0	174	54	2	0
	29.6	68.9	1.4	0.0	78.6	21.4	0.0	0.0	75.7	23.5	0.9	0.0
23年度	246	384	42	0	212	52	0	0	172	46	0	0
	36.6	57.1	6.3	0.0	80.3	19.7	0.0	0.0	78.9	21.1	0.0	0.0
24年度	214	390	26	0	148	92	0	0	112	106	10	0
	34.0	61.9	4.1	0.0	61.7	38.3	0.0	0.0	49.1	46.5	4.4	0.0
25年度	200	304	42	2	130	70	6	2	88	104	10	2
	36.5	55.5	7.7	0.4	62.5	33.7	2.9	1.0	43.1	51.0	4.9	1.0
26年度	198	344	48	0	76	154	2	0	70	138	30	0
	33.6	58.3	8.1	0.0	32.8	66.4	0.9	0.0	29.4	58.0	12.6	0.0
27年度	156	378	38	0	104	108	12	0	86	100	36	2
	27.3	66.1	6.6	0.0	46.4	48.2	5.4	0.0	38.4	44.6	16.1	0.9

（専門職学位課程における学生アンケートの調査結果）

（現職教員回答）

- ・1年次、今日的な教育課題とその解決案についてレポートを何本か書きました。そのおかげで、事象を多角的に見る力が身に付いたと思います。個人研究で作成した教材や資料も現場の実態に合わせて活用しています。研究主任をしています。指導主事訪問での指導主事からの校内研究に対する指導・助言は、ほぼパーフェクト・ゲームでした。
- ・職場において、組織体制で動く際に周囲をまとめることができた。また、理論的分析が教材研究等に役立った。
- ・学校訪問や施設見学など、現場にいる時にはできなかったことができ、現在現場に戻っているいろいろな情報を収集できたと実感できている。

（ストレートマスター回答）

- ・現職の先生方と共に学ぶことで、学生の立場では知り得ないことが、普段の会話の中や授業のディスカッション場面で知ることができた。
- ・実習が多くあることで学校現場にいることの出来る時間が多い。そのことによって生徒や教師の姿を長いスパンで目にすることができた。

（出典：平成27年度（前期）教職大学院に関するアンケート集計結果（平成27年9月30日教員会議資料））

（専門職学位課程における現職派遣教員の復職後の地位）

	校長	教頭	指導主事・ 主幹教諭等	研究主任・ 教務主任等	修了生（現職 教員）合計
平成21年度修了者	1	9	4	2	28
平成22年度修了者	0	3	7	4	30
平成23年度修了者	0	4	2	2	28
平成24年度修了者	0	2	3	1	18
平成25年度修了者	0	1	4	2	14
平成26年度修了者	0	0	0	1	13